
魔物と術師

竜気

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔物と術師

【Nコード】

N5945X

【作者名】

竜気

【あらすじ】

これは私の別の作品とは、全く関係の無い物です。気楽に読んで頂けると嬉しいです。

更新は亀になると思いますが、『魔物と術師』の物語をどうぞ。

1話・日頃の日常を喜べ（前書き）

これはふと思いついて書いた物です。

更新もかなり不定期になると思いますが、頑張らさせて頂きます。

なお、私は日本人とドイツ人のハーフで、日本に来て4年目という日本語も不安定な時期です。

誤字・脱字等があれば、遠慮なく注意して下さい。

では、1話、参りましょう。

1話・日頃の日常を喜べ

<Side グラムドリンク>

「暇だ……」

僕はグラムドリンク、通称「リンク」、12歳。

銀髪銀眼の者だが、日頃の授業がつまらなすぎて、思わずため息を吐きながら窓の外を眺めていた。

さて、ここは「アロンドイト」という名の世界。

この世界の裏側に、「アンダーヴェルト」という魔物が住む世界が存在する。

……行った事無いけど。

ま、それは良いとして……。

一応、僕達人間は魔物を^{グラスタ}こちらの世界に召喚出来たりする。

グラスタの召喚者を術師^{ソーサラー}って言うんだ。

だからって特に何も無いけど、グラスタを使って犯罪を犯す奴^{ほか}がいるんだよ、これが……。

まあ、召喚するには勉強して知識とか身につけなきゃ、無理なんだけど。

そういう勉強をするのは・・・10歳からだな、うん。

で、僕は3年目って訳。

5年間学んで、めでたく卒業ってとこかな。

1年習えば召喚だって出来るようになるし、その数も複数可能になつてくる。

でも、召喚するには、^{ガイスト}精神力が欠かせない。

そのガイストを使用する時は、人間誰しも、^{ゴッター}神力光を身に纏う。

あ、オーラみたいな奴ね。

因みに僕のゴッターは銀色、よろしくつと・・・。

グラスタは複数召喚可能って言ったけど、5体も同時に召喚出来たら、それこそ天才だからね？

1体召喚するのに、もの凄い量のガイスト使うから。

今のところ、僕と契約を結んでいるグラスタは1体だけ。

結構高位の奴なんだからね、甘く見ないでもらいたい、うん。

・・・皆の平均2体だけど。

こ、この1体と契約するの、大変だったんだから！

うん、言い訳として受け取らないで欲しいな……。

「はい、注目！」

教卓に手を叩きつけて、教室内を静めるガトー先生。

何かな……？

「明日、毎年恒例のグラスト試験を行うっ！」

ふう……。

ガトー先生、今なんとおっしゃいました？

見れば、周りのクラスメイトも眼を点にして驚愕している。

「「「「「「「「えええっ!?」「「「「「「「

教室内に複数の声が重なって響いた。

ああ、そついやあの試験、この季節だっけか……。

はっはっは……忘れてた……。

僕は頬杖を突いたまま、苦笑する。

「面倒な……」

去年は一昨年を思い出し、額に手を当てて何とか逃れようと策を考

える。

仮病？

それとも怪我する？

・・・やめとこ、痛そうだしね。

では、先程の長つたらしい説明の後で申し訳ないけど、このグラス
夕試験の説明もさせてもらおうよ。

ま、簡単に言えば次の学年への試験だ。

先生と生徒がグラスタを戦闘させて、クラス担任の先生が採点する。

あれ、緊張はするし闘わなくちゃいけないしで、かなり面倒なんだ
よねえ・・・。

・・・ま、いつか。

どうせ、いつかはやらなきゃいけない壁なんだ。

早めにやって終わらせた方が、良いつて言えば良いかもしれない。

その試験なんだけど、特別の訓練室でやる。

訓練室って言うだけあって、壁や床、天井は強固な造りになってる
んだ。

イコール、本気OKって事ね・・・はは。

試験は自分のグラスタの中で、一番強い者で行うんだけど・・・僕に選択権は勿論無いね。

1体だし。

でも、僕はグラスタの強さを信じてるし、誰にも負けないと思うよ、うん。

「リンク、自信の程は？」

僕の前の席に座っている、フロッティが振りかえって声をかけてきた。

フロッティは紅い瞳に、輝く金髪。

結構熱血な少年、という言葉がぴったりだ。

「自信？聞くまでもないと思うけど・・・？」

「へっ、そうだったな」

フロッティは僕の言葉を聞き、口元を緩めて笑みを浮かべる。

フロッティは僕の幼馴染で、一番心を許せる親友だ。

幼馴染と言えばもう1人。

「あは？ずいぶんとした自信じゃない？」

僕の隣の席に座っていた女子、リアファルが顔を上げてこちらの表情を伺う。

何処までも碧い眼と、腰までもある紅い髪を揺らした。

僕達はリアと呼んでいる。

フロツティと同じく昔からの付き合いだ。

フロツティとリアファルは共に、グラスタを2体所有している。

「はは、まあね。そういうお2人さんは？」

僕が笑みを浮かべて問い返すと、如何やら愚問だったらしく、2人は余裕の笑顔だ。

「はいそこ、静かに！」

「へ〜い」

ガトー先生の注意を受け、フロツティが気の抜けた返事を返して前を向く。

「相変わらずだなあフロツティ。この鉄拳を食らえええっ！」

ガトー先生は両手の拳でフロツティの頭を挟み込み、力を加えながらねじっていった。

いわゆるグリグリ攻撃という奴。

「だあああつー!」

フロツティは堪らず椅子を蹴って席を立ち上がり、ガトー先生の拳を振り払う。

「フッフッフ、私に敵うと思っっているのかね？フロツティ君？」

いつもとは全く違う口調で、ガトー先生がフロツティに迫った。

日頃と変わらない光景に、皆が笑い声を漏らす。

まあフロツティってば、毎回毎回、ほぼ毎日のようにガトー先生と睨み合いを繰り返し、その戦況をクラスメイトが笑いを堪えながら見守るといふ、平凡な日々であった……。

家に帰ったのは、午後3時半頃。

「ただいま」

家の扉を開けても、返事は帰って来ない。

当然だ。

両親や僕の兄は、すでに他界している。

父親はグラスタを使った事件に巻き込まれて死亡し、母親はもとから心臓が弱かった。

兄は1年前、ふと家を出たまま帰って来ない。

警察にも言っつて捜索願いは出したけど、今じゃ僕だつて諦めかけてる。

リビングのソファ―に荷物を放り投げ、首にかけていた母の形見であるペンダントを握りしめた。

このペンダントは風呂に入る時以外、肌身離さず持ち歩いている。

それ以外の時、一度も手放した事は無かつた。

『あなたはグラムドリンク。その名を、誇りに思いなさい』

昔、小さい頃、嫌と言つ程何度も聞かされた母の言葉。

今では耳に染みつき、幻聴が聞こえる程だ。

この続きの言葉があつたと思つただけど、こつちの方が印象が強すぎてほとんど覚えていない。

何で誇りに思わなきゃいけないんだろ・・・？

ま、いいや。

とりあえず晩御飯。

朝多めに作つておいた物が残つてるから、それをテレビでも見ながら食べていく。

「ふう……ごちそうさま」と

食器を水に付け、リビングでテレビを見ていた。

「明日かぁ……試験……」

テレビの電源を切り、グデンツとソファーに寝転がって天井を見つめる。

「相手は誰かな……？とにかく、あの先生は嫌だなあ〜」

これまで2回の試験を受けている訳だから、ある程度試験の先生は分かっていた。

その中で、特に闘いに関して情熱を燃やす先生がいるのだ。

あの情熱論には付き合っていられない。

「『闘いこそが漢の使命だ』とか、『心が不安定だぞ、少年よ。もっと強固な物でなくてはならん』とか……」

自分で言いながら、思わず苦笑してしまう。

いろいろ考えている間に、如何やら眠ってしまったらしい。

その後の記憶は無かった……。

—— チク……チク……

「う……」

時計の時を刻む秒針の音で、僕は眼を覚ました。

「ふあゝあ……。あ、いつの間にか寝てた。今は……。って7時半!？」

遅れる!

と思うや否や体は動き出し、パンで手早く朝食を済ませる。

バッグを手に持ち玄関へ走り出したが、ふと大事な事を思い出してリビングに駆け戻った。

リビングのテレビの横の台に、写真立てがある。

僕が写真を撮った時のもので、両親と兄が写っていた。

「行ってきます!」

威勢良く声を張り上げ、ペンダントを写真に写る3人に見せた……。

「よお!リンク」

教室に入り、席に着くと同時にフロッティが拳を突き出してくる。

「おっはよ〜」

僕も拳で突き返し、朝の挨拶を済ませた。

荷物をまとめた頃に、リアファルも登校し自席に座る。

「おはよう、お2人さん」

「おはよう」

「よっ」

リアファルの挨拶に僕とフロツティがそれぞれ答え、何気ない1日が始まりを告げた。

「あなた、相変わらず髪が乱れてるわよ・・・？」

リアファルがフロツティの乱れ切った髪を見て、ポケットから櫛くを取り出す。

「はは、悪いな」

フロツティはそれを受け取り、ある程度整えた。

「サンキュ」

「どうも」

櫛を返したところで、ガラガラッと教室前の扉が開きガトー先生が入って来る。

が、

「あ……」

「お！」

「あら……」

僕達3人は次に起こった光景を見て、思わず声を漏らした。

扉の上に挟まっていた黒板消しが、ガトー先生の脳天にヒット。

チヨークの粉が舞い散る。

何とも古典的な仕掛けか……。

「だあれえだあ？こんな罷仕掛けた奴あ……！」

それでもガトー先生の怒りゲージは、マックス頂点に。

「へっへ〜ん、昨日の仕返しだ！」

フロツティが胸を張って、舌を出した。

「フッフッフ……。やはりお前かああ！フロツティイイイツッ！！！」

ガトー先生は荷物を教卓に置いて身軽になると、フロツティ目がけて猛ダツシュする。

「逃げよ・・・！」

フロツティも危険を察知したのか、教室から飛び出した。

「待あめてえええいつつ！！」

それに続いてガトー先生が教室の外へと、姿を消す。

「騒がしい朝ね・・・」

クラスメイトが爆笑している中、僕の隣で冷静に本を呼んでいたリアファルが、小さく呟いた。

この騒動により、試験開始が1時間程遅れた事を記しておく・・・。

< Side リアファル >

あの騒がしい朝を迎えたのは、今に始まった事ではないからまだ慣れてるけど、フロツティも飽きたりしないのかしらねえ・・・。

先生も先生で喧嘩っ早い性格・・・本当、読書に集中させて欲しいものね。

「あ、帰って来たよ」

リンクの声を聞き、本から視線を上げる。

フロツティは先生に持ち上げられ、動きを封じられた状態で帰って来た。

「哀れね・・・」

私が無表情で呟くと、それはひどいんじゃない？とリンクが苦笑しながら頬杖を突く。

フロツティは強引に席に座らされ、先生は教卓に戻った。

「何処を如何逃げ回ったの？」

リンクが面白そうに声をかける。

「まず東側の階段で1階に降りて、西側の階段使つて3階に。んでまた東側の階段でここ、2階に降りてきて・・・西側の階段で捕まった。先生の奴、待ち伏せしてやがったんだぜ？」

まあ、そうでしょうね。

フロツティが策など無しに突き進むタイプという事を、一番よく知っているのだから・・・。

東、西、東とくれば西になるのは分かり切ってる事ね。

いい加減、それに気づいたら如何なのかしら・・・。

「何だよ・・・？」

私の視線に気づいたフロツティが、不満そうに声を低くする。

「フフ・・・別に」

まだ気づいていないこの少年を見て、私は笑みを浮かべた。

すると、先生が1つ咳払いして私達に注目 of 合図を出す。

私は本をしまい、視線を前へ向けた。

「え〜では、それぞれ相手をする先生を発表する」

先生は妙にかしこまった様子でチョークを手に、先生の名を上げていった。

次々と黒板に記されていく先生の名を見て、喜ぶ者もいれば落ち込む者まで様々。

私は普通の先生だったけど、フロツティはあの熱血先生のようなね。

リンクは冷静沈着な先生のように、2人共喜んでいるわ。

フロツティは熱血先生の方が嬉しいでしょうし、リンクは前からあの先生と一戦してみたかったようだし・・・。

まあ、結果は上々。

「後は戦闘。楽しんでいきましょうか・・・」

私は黒板に記された先生の名を見つめながら、口元に笑みを浮かべた・・・。

1話・日頃の日常を喜べ（後書き）

この調子で頑張りたいと思いますので、よろしくお願いします。

2話：大志を抱く少年よ（前書き）

2話、参りましょうか。

2話：大志を抱く少年よ

<Side フロツティ>

如何やら試験の一番手は俺らしい。

良いねえ、一番手！

燃えて来るつてもんだ。

で、相手は毎年恒例の熱血先生であるブリューナク先生、通称ブナク先生だ。

クラスメイトの皆やリンクも、あの熱血論が面倒って言うてるけどな、俺は良いと思うぜ。

ブナク先生の言葉は闘志を燃やすからな。

これまで2回試験を受けてきたけど、ブナク先生とは当たらなかつたから待ってたんだよ。

俺達は訓練室に移動し、集まっていた先生のつまらん注意事項を聞いていた。

あ、因みに俺のゴッターは紅色な。

よろしく〜。

「では注意事項は以上です」

試験担当の先生が説明を終えて、やっと試験が始まる。

「試験番号1番」

「はい！」

先生の声に、待ってましたと立ち上がって前へ進み出た。

ブナン先生と距離を置いて対峙すると、先生がおつと軽く驚いている。

「むむつ、君はフロツティ君ではないか！感動だ！私の論理を一番分かってくれる君と闘えるとは！」

「ブリューナク先生、感動は後で良いですから……」

感動しているブナン先生に、別の先生が苦笑いを浮かべながら先を促す。

「む、そうだったな。オッホン、では始めよう！」

ブナン先生は1つ咳払いして、気を引き締めた。

ああ言うところが面白いんだよなあ。

まあそれは良いとして……早速召喚しないとない！

こちらより1歩早く、ブナン先生が燃えるように紅いゴッターを身に纏う。

俺もあれくらい、紅いゴッターを出したいもんだぜ！

そんな事を思っていると、ブナン先生が詠唱を始めた。

詠唱する事によって、俺達ソーサラーはグラスタを呼び出す事が出来る。

「我が乞うは気高き獣。捕える獲物を薙ぎ払え！」

ブナン先生の紅いゴッターが集中し、渦を巻きながら巨大化した。

「熊^{ヴァー}！」

先生の呼び出しと同時に、巨大な熊、ヴァーと呼ばれるグラスタが出現する。

そう、ブナン先生お気に入りのグラスタ。

くっっ！

こいつと闘うのをどれだけ待っていた事か！

俺も召喚する為、紅いゴッターを身に纏う。

「我が乞うは紅き炎！立ち塞がる物を焼き払えっ！」

俺の頭上でゴッターが渦を巻き、巨大化すると全身を紅い毛で包む紅鳥が出現した。

「^{ロター}紅鳥ッ！」

俺のグラスタの中で、最強の奴だ。

『クク・・・！久しぶりに呼び出したと思えば、戦闘か。小僧』

ロターが闘える事を喜び、小さく笑う。

「おう！どんと行くぜ！」

「うむ！来い！」

俺とブナン先生は拳を握り締め、戦闘を開始した。

ヴァーが先手を打ち、宙に滞空するロター目がけて走り出す。

『撃ち落としてやるぞ、紅鳥よ！』

「ゴオアアアアッ！」

ヴァーの声と咆哮が同時に響き、訓練室に木霊こだました。

『出来るといふならば、やってみよ！』

「ガアアアアアアッ！」

対してロターもやる気満々である。

ま、それはソーサラーも同じだけどな・・・。

「ヴァーよ！叩き落せ！」

「ロター！翻弄してやれっ！」

俺とブナン先生が叫ぶように指示を出す。

ロターは訓練室内を飛び回り、ヴァーは叩き落そうと隙を狙って眼を凝らした。

ロターにこの訓練室は狭すぎたようで、所狭しと飛行している。

やべえ、ここが狭い事忘れてた……。

つてか訓練室つてもっと広くあるべきじゃねえの？

これでも学校内の教室じゃあ一番広いけど、ロターにとっちやあ狭いよなあ。

天井壊して空へ……。

無理だな。

ここの壁は結構硬いつてリンクが言ってたし……それにロターはどちらかと言うと広い範囲に攻撃するタイプだし……。

しゃあねえ！

ここは根性で乗り切るか！

「炎！」

この広い部屋の中で俺の声が聞こえたのか、否、聞こえていなくて

もソーサリーとグスタは繋がっているから、何処にいても指示は聞こえる。

ローターは嘴を開き、灼熱の炎でヴァーの一角を焼き払った。

「ガオウ！」

ヴァーは炎が迫っていると知り、後方へジャンプして炎から逃れる。

ローターは爪に炎を纏わせ、ヴァーに襲いかかった。

よし、行け！

当たると確信した俺の目の前で、ヴァーはその体型からしてあり得ない素早さで爪をかわし、ローターに鋭利な爪を振りかざした。

「ガアアアアアッ!？」

地面に落とされるローター。

「取ったりいい！」

ブナン先生が拳を突き上げて喜ぶが、

「まだだぜえ！」

俺の声に反応して、ローターがムクリと体を起こし飛翔した。

「む、まだであつたか！」

『次こそは!』

「ゴアアアツ!」

ヴァーが飛び上がったロターを視線で追い、次の攻撃に構える。

「炎!」

「ガアツ!」

俺が合図する事を分かっていたかのように、ロターは炎を吐き出した。

炎はヴァーの視界を遮り、それを利用してロターが滑空する。

『焼け落ちよ!』

「ゴアアアアツ!」

ロターが炎を盾に接近し、ヴァーの正面で紅蓮の炎を吐き出した。

「っしやあ!」

それを見て勝利を確信する俺だったが、

「がっはっは! 甘いぞ、少年よ!」

ブナン先生の笑い声にはっとなる。

「ロター!」

俺はすぐに腕を振るって指示を出し、ヴァーから離れるようロター

に伝えた。

一瞬遅かった……。

「ゴオオアアアアツ!!」

その毛皮を焦がされても尚ヴァーは立ち上がり、爪でローターの左翼を斬り裂く。

紅い羽が数枚、宙を舞った。

——ズウンン……!

「ローター!?!」

紅鳥は静かに墮ち、アンダーヴェルトへと戻っていく。

グラスタが重傷を負った場合、強制的に向こうへ返されるのだ。

俺は消えかかっているローターに駆け寄り、嘴の部分に触れる。

「よく頑張った。休んでくれ」

『次の戦闘、楽しみにしておるぞ。小僧』

自分が怪我を負ったというのに、すでにその先を見ているローター。

俺は思わず小さく吹き出し、

「おう!」

コンツと軽く嘴を突いて、笑顔で俺は返した。

ロターが完全にアンダーヴェルトへ帰った直後、ブナン先生のヴァーも消えていく。

「うむ。今回も熱い闘いであつた！」

『また呼ぶといい』

ヴァーは一言言い残し、向こうへ帰った。

ブナン先生が俺に歩みより、ガシツとその大きな手で俺の髪を滅茶苦茶にかきむしる。

「ああ！何すんですか!？」

俺は慌てて手で整え直し、こんな事をした訳を問いただした。

「フロツティ君、グラスタを信じ切った闘い、見事であつた！」

ブナン先生は喜びの涙を流しながら、俺を褒める。

・・・大げさだろ。

「うむ！また闘うのを楽しみにしておるぞ！少年よ、大志を抱けっ
！」

「あ、はい！」

ガシツと肩を掴まれたので、思わず元気に返事してしまった。

「がっはっは！」

高笑いしながら、ブナン先生が訓練室を出ていく。

な、何だったんだ今の言葉……。

<Side グラムドリンク>

「お疲れ〜」

僕達は訓練室の外で、窓越しに試験の様子を見学していた。

笑顔で退室してきたフロツティに、僕が声をかける。

「負けちまったけど、気分は良いぜ！」

ニカツと笑って見せるフロツティを、ガトー先生が満足そうに見ていた。

うんうんと、頷きながら名簿に採点していく。

僕はそれを横目で見ながら、フロツティは合格だなと悟った。

「試験番号2番！」

「はい！」

試験担当の先生に呼ばれ、クラスメイトの1人が相手の先生と共に
訓練室へ入る。

その後も試験は続き、クラスの大半が試験を終えた頃に昼食となっ
た。

僕とリアは最後の方に残ったようである。

早く終わらしたかったのに……。

「今日の給食も美味えなあ！」

皆が喜ぶ給食の時間。

周りのクラスメイトも楽しそうに会話していた。

僕の前の席で、フロツティがガツガツと食料を口に運んでいく。

「ゆっくりゆっくり」

それを見て、思わず声をかけてしまう。

「だいひょうぶ、はいひょうぶ！」

大丈夫、と言いたいようだが全く言えていない。

「食べながら口を開かない」

僕の隣で黙々と食べ進むリアが、冷静に注意してくれた。

フロッティはゴクンと呑み込んで、大丈夫だと自信あり気に繰り返す。

その自信は一体何処から……。

僕も給食を味わいながら食べていると、

「ッ!？」

急にフロッティが喉を詰まらせた。

「だから言ったのに……」

僕は席を立ち、フロッティの背中を叩く。

「つぶは！悪いリンク」

やっと喉を通り終えたらしく、呼吸を整えるフロッティに、僕ももう一度注意してから自席についた。

その後は特に事も無く、静かに給食が過ぎてくれた。

「えゝそれでは、午後の試験を始めます。試験番号15番!」

僕達は再び訓練室外の窓際に集まり、試験を再開している。

「はい」

試験担当の先生に呼ばれ、リアが立ちあがった。

「頑張つて」

僕は小さな声で応援すると、リアは静かに笑みを返し訓練室へと入っていく。

リアの相手はこの学校内でも珍しい、特に長短がある訳でもない普通の先生、ルーフェ先生だった。

いや、本当、この学校に碌な先生いないから……。

ある先生は熱血、ある先生はかなりの無口、ある先生は冷静すぎるからね。

あ、でもルーフェ先生はある意味すごいかも……。

<Side リアファル>

やっと私の試験。

ここまで待つのが大変だったわね……。

とりあえず、

「お手柔らかにお願いします」

私が試験相手のルーフェ先生にそう言うと、笑みを浮かべて返される。

「お手柔らかなには出来ないわあ。これ、試験ですものねえ」

全体的に和ませる雰囲気を持っていて、よく生徒の仲裁役に選ばれる先生だ。

まあ、私もあの雰囲気には敵いそうにないけど。

「私のグラスタはこの子ですよ」

先生はニコリと笑って、水色のゴッターを身に纏う。

「我が乞うは碧き大海。その海に沈み礎いしずえとなれ」・・・

ゴッターが渦を巻き、まるで水のように変化した。

その渦から碧い鱗を纏い、槍をその手に握った人魚が現れる。

「私のグラスタ、人魚ニクスですよ」

相変わらずの和やかな笑みを浮かべ、先生がグラスタの名を口にしたら。

「では・・・」

私も召喚する為、蒼いゴッターを身に纏う。

「我がごうは永遠とわの冷氣。邪魔な物は縛りつけよ。・・・」

私の正面でゴッターが渦巻き、白き虎が姿を現した。

「ウェイブ白虎、寒気の走る冷氣をお願いね」

『はい』

私の言葉に、ウェイブは頷いてくれる。

ニクスが宙に浮き上がり槍を構えるのと同じく、ウェイブも腰を少し落とし、いつでも駆け出せる状態になった・・・。

2話：大志を抱く少年よ（後書き）

こちらで次回予告なんぞやってみる・・・。

渦巻く水、凍てつく氷。

その末に待つは満足か・・・後悔か。

3話・翔ける矢羽を食らえ（前書き）

3話、参りませす。

3話：翔ける矢羽を食らえ

<Side リアファル>

流石ね。

深き海の底を住みかとする人魚相手に、こちらが有利だと思い込んでいた私の不覚だわ……。

ニクスは槍を振るって、ウェイブを近づけさせない。

虎に槍は厳しいわね……。

私は武器を持つ相手に悩み、腕を組んで顎に手を当てる。

「……冷気」

『承知しました』

私の一言がウェイブに届き、ウェイブの口が開かれ鋭利な歯が姿を現した。

白き虎の口から、その身を凍らす冷気が放たれニクスを包む。

「ああ、ニクス、大丈夫？」

『微妙ね』

ニクスは、槍が凍てついていくのを見届けながら苦い笑みを浮かべ

だが、相変わらずルーフェ先生の感情は穏やかだ。

・・・心配してるのかしら。

ウェイブは前脚の爪に冷気を纏わせ、ニクスの槍が凍ったのを確認すると、襲いかかる。

「オウツ！」

「っ・・・！」

ニクスは凍った槍で何とか受け止めるが、槍が壊れるのも時間の問題だ。

そう思っていた直後、槍にひびが入る。

「いけるわよ、ウェイブ」

「ガオアアツ！」

ウェイブが爪に纏う冷気の量を増やし、更に槍を凍らせて脆くした。

——バキインツ！

槍はついにその姿を保っていらなくなり、粉々に碎け散る。

「まあ・・・！」

それを見た先生が、口に手を当て驚いていた。

「ウェイブ、たたみかけて」

『了解です』

私の指示で、ウェイブはニクスの周りを走り回り、翻弄する。

槍を持たない人魚は、釣り人に誘われる魚と変わらない。

こちらの勝利は目前だった。

「甘いわよお、リアファルさん？」

ルーフエ先生がチツチツと指を振ってみせ、ニクスは余裕の笑みを浮かべる。

「さあニクス、新しい槍よ」

ルーフエ先生はゴツターを身に纏い、集束させて槍を作り上げた。

「ゴツター・・・！」

ゴツターを使用する事で武器を創生出来ると習ったが、あのように作り上げるとは・・・。

興味深いわね。

私はふと床を見つめ、策を考え直した。

——コンコンッ

私が靴で床を突くと、ウェイブが指示の意図を読み取り、床一面を凍らせていく。

「あらま……」

如何しましょう、と床を見つめるルーフェ先生。

ウェイブは氷の床を滑り、ニクスに急接近。

「ッ!？」

振り抜かれた爪を咄嗟に槍で弾くニクスだが、ウェイブの前脚は一本だけではない。

左前脚の爪に冷気を纏わせ、ウェイブは槍を弾き飛ばした。

またすぐに武器を出されないよう休まず追撃を仕掛け、絶対零度の冷気が辺りを包み、ニクスの下半身が凍りついた。

「ニクス、無事ですか？」

『全然』

ニクスは氷を溶かす為、自分の体を水で包む。

水の温度を少し下げて、ほんの少しずつだが溶かしていった。

「縛りつけて……」

『はい』

私が小さく呟くと、ウェイブは水ごと冷気で凍結させる。

「終わりです。・・・砕け」

私は右腕を振ってウェイブに合図すると、ウェイブは両足に冷気を纏わせ氷を砕いた。

「ニクス・・・！」

ルーフェ先生は初めて、表情で分かる程驚いている。

ニクスはアンダーヴェルトに強制送還され、ルーフェ先生は一声かけた。

「ありがとうございます。休んで下さいね」

ニクスはニコリと笑みを浮かべ、向こうへ帰っていく。

「ウェイブ、上出来よ。良く頑張ったわ。ゆっくり休みなさい」

『これほどの傷、怪我にも入りません』

ウェイブは小さく頭を下げ、向こうへ帰った。

「リアファルさん、素晴らしい闘いでしたわあ。文句無しですねえ」

「ありがとうございます。先生も、お相手感謝します。ゴッターの使用方法も勉強になりました」

「あらあ、それは良かったわねえ」

ルーフェ先生はニコニコと笑い、頑張るのよと言い残して私と別れた。

<Side グラムドリンク>

「お疲れ、すごかったよ」

訓練室から出てきたリアに、僕は一言声をかける。

「どうも」

リアはニコリと笑い、僕と静かにハイタッチして交代の意を示した。

「試験番号、16番！」

クラスメイトのメンバーが続々と試験を終え、僕は最後の1人である。

早いうちに終わらしたかったんだけど、何で最後？

「試験番号、28番！」

「はい」

僕は担当先生のラハイグ先生と共に、訓練室に入った。

ラハイグ先生は学校一冷静で無口な先生で、いつも本を持ち歩いている。

先程までもずっと本を読んでいたのだ。

僕と向かい合って、やっとパタンツと本を閉じ脇に抱える先生。

「では、参ります・・・」

先生は緑のゴッターを纏い、詠唱を始める。

「我が乞うは剣の刃・・・翔ける天を斬り裂け・・・」

緑のゴッターが先生の頭上で渦を巻き、巨大化した。

「アドラー驚・・・」

『出番ですか・・・？』

薄緑色の羽を持つ、立派な鷲が姿を現す。

来た・・・！

ずっと闘いたかった相手・・・。

僕は全身に白銀のゴッターを纏い、詠唱を開始した。

「我が乞うは疾風の翼。その翼も以て天を翔けよ・・・！」

『主、呼んだか・・・？』

僕の頭上に、白銀の巨鳥が姿を現す。

ヴォーゲル
「古鳥・・・！」

ヴォーゲルの尾羽は長く、風で揺らめき白銀に輝いていた。

「行きます!!」

僕が試験開始の言葉を告げると、ヴォーゲルとアドラーが翼を広げて飛び立つ。

——ゴゴゴ・・・!

すると、流石に巨鳥2体では狭すぎると感じた先生が、天上を開けてくれた。

「頼みましたよ・・・」

ラハイグ先生は、舞い上がったアドラーを見届け、再び本を読み始める。

まあ、採点は他の先生がしてくれる訳だから、別に戦闘を見ていなくても良いんだけど・・・。

「ガアア・・・」

「ゴアア・・・」

ヴォーゲルとアドラーがある程度上昇して所で、お互い睨みあうよ

うに対峙した。

——ビュウウ・・・!

風が吹き荒れ、ヴォーゲルが先に動き出す。

アドラーもその後を追いつ、2体は螺旋を描くように飛翔した。

ヴォーゲルはその身に風を纏い、尾羽に小規模の竜巻を巻かせる。

風の古鳥、ヴォーゲル。

高位のグラスタで、契約するのに苦労したんだ。

でも、ちょっととした理由もあって、ヴォーゲルは僕を気に入ってるみたいなんだけどね・・・。

『我が主に、恥をかかせる訳にはいかぬ。勝たせてもらうぞ』
「ゴアアアアアッ!」

ヴォーゲルは両翼を大きく羽ばたかせ、羽を刃として複数放つ。

『そういう訳にもいきません。こちらとて、同じ思いです』

アドラーはヒラリヒラリと矢羽を避け、ヴォーゲルに接近した。

そこへ、竜巻を纏ったヴォーゲルの尾羽が直撃し、アドラーが態勢を崩す。

「ゴアッ!」

ヴォーゲルを嘴を開き、天災に匹敵する竜巻を放ってアドラーに追撃を仕掛けた。

「ガアア・・・」

アドラーはそれをまともに食らい、力無く訓練室目がけて落下を開始する。

——ブワァンッ！

だが、床に直撃する寸前でアドラーは態勢を立て直し、フワリと降り立った。

アドラーの羽は竜巻によって少々乱れているが、何事も無かったかのように舞い上がる。

「・・・」

僕はヴォーゲルが大きな怪我を負わない事を願い、手に力を込めた。

——ブウンッ！

アドラーはヴォーゲルを通り過ぎた所で、振り返り急降下を始める。

鋭い爪で、ヴォーゲルの左翼を斬り裂いた。

「ヴォーゲル・・・！」

天を白銀の羽が舞い、落ちて来るヴォーゲルを僕は啞然と見ていた。

その身に纏う竜巻が風の流れを作り、ヴォーゲルを一瞬で天へと運ぶ。

速い。

――ザシュツ・・・！

「ゴアアアアッ！？」

アドラーの左翼が斬り裂かれた。

『これで対等だ』

ヴォーゲルは落下するアドラーを追い、近くまで来ると更に追撃を仕掛ける。

竜巻が、唸りを上げてアドラーを包み込んだ。

「ガアアアアアッ！」

――ズドオンツ！

アドラーは竜巻を食らいながら、訓練室の床に激突する。

室内は風が吹き荒れ、震動が駆け巡った。

――パタンツ

ライグ先生が本を閉じ、強制送還されるアドラーに歩みよる。

「よく頑張りました……。きちんと見ていましたよ……」

先生も本を読みながら、戦況は把握していたらしい。

『すいません。お力になれませんでした』

アドラーの一言に、先生は首を横に振って見送った。

ヴォーゲルが傷ついた左翼を痛めながら、何とか降りて来る。

「ありがとう、大丈夫？ ゆっくり休んで」

『承知した。いつでも呼ぶといい。我が主よ』

ヴォーゲルはアンダーヴェルトに消え、ラハイグ先生が僕に歩み寄って来た。

「良く出来ていました……。素晴らしかったですよ……」

小さく呟き、口元に優しい笑みを浮かべながら、訓練室を出ていかれた。

「試験合格者を発表する！」

僕は教室に戻り、教卓の所で先生が名簿の紙と向き合っていた。

周りの皆は息を呑み、次の言葉を待つ。

「フロツティイッ！イベントが中止になっても良いのかぁ!？」

「……………すいませんでした!」

先生の言葉にフロツティが硬直し、敬礼して謝罪する。

教室内の笑い声が飛び交い、先生がイベント内容を黒板に書いていった。

「これだぁっ!」

チョークが砕ける程の勢いで、先生がビシッと指差した。

……………はい?

黒板には「短期旅行」と記されており、クラスメイトの歓声が沸き起こる。

「先生!」

僕は冷静に考え、挙手した。

「リンクか、何だ?」

「旅行費は…………」

ただそれを心配して聞いてみると、先生は俯いて不気味に笑う。

「フッフッフ、先生が考えていないとも思ったかぁ!1週間前、

集金があつただろう！」

あつ、と皆が口を開き啞然とした。

あの理由不明な集金は、これの為だったのか……。

つて事は、全員が合格してなくても行くつもりだったって事、だよ
ね。

「先生、準備良い！」

フロッティが、席を立ち上がってナイス！とサムズアップした。

「はっはっは！」

先生は高笑いし、クラス皆明日の事について楽しく話し合っている。

「それでは、各自明日の準備をしておくように！準備物はこのプリントに書いてある！」

先生はバシッと手に持つプリントを叩き、皆に配っていった。

短期旅行か……。

皆と旅行なんて初めてだ。

僕は明日を楽しみに、家へと帰宅した……。

3話・翔ける矢羽を食らえ（後書き）

静かなる自然に、騒がしい太陽が顔を出す。

術師は誰もが、それを望んでいなかった・・・。

4話・短期旅行の楽しみ(前書き)

4話、参ります。

4話：短期旅行の楽しみ

<Side グラムドリンク>

僕は意気揚々と家に帰り、プリントを見ながら明日の準備を進める。

旅行は2泊3日らしくって、荷物はなかなかの量になった。

準備が終わり、晩御飯を簡単に作ってニュースを見ながら食べる。

「・・・銀行強盗、か」

テレビに大きく映っているその様子を見て、小さく呟いてみた。

強盗団は、今だ逃走中だとか・・・。

「早く捕まえて欲しいなあ・・・」

食器を洗いながらそんな事を思っていると、次のニュースが変わる。

<Side リアファル>

私は一度帰宅し、また家を出ていた。

今日は週1回行われる弓道の日だ。

紅い髪を1つに結わえ、矢をつがえて弦を引き絞る。

町の体育館で15本程矢を射た後、私は先生のもとへ向かった。

「先生」

「ん？」

「今日、急に学校で短期旅行が決まって準備などがありますから、帰ってもよろしいですか？」

「旅行か、良いぞ」

私は先生に一礼し、荷物をまとめて帰宅した。

「あら、おかえり。早いよね」

家に帰ると母が珍しい、と呟いている。

「ええ、明日旅行だから」

「・・・そうなの？」

「今日、急に決まったのよ。全く、こちらの事情も考えて欲しいもの・・・」

私は文句を言いながら、明日の準備に取り掛かる。

「ああら、そうは言いながらも顔に嬉しいって書いてあるわよ・・・」

「？」

私は荷物をまとめ、2階に上がろうと階段に足をかけた。

「幻じゃない？」

母に小さな笑みを返し、そのまま2階に上がる。

背後で、母の微笑みを見たような気がした……。

<Side グラムドリンク>

午前5時半。

「……」

気が付くと朝を迎え、僕は天井を見上げていた。

ノソリと起き上がり、顔を洗う為に洗面台へ向かう。

冷たい水を顔にかけて、やっと眼を覚ましスッキリした。

「おはよう」

リビングに行ってテレビを付け、写真の3人に軽く声をかける。

『早いね……』

僕が小さい頃、早く起きた時に母がよく褒めてくれた。

優しい微笑みを浮かべて……。

って早く朝御飯！

僕はボクツとしていた事に気づき、急いで済ませる。

「よいつしよ……」

荷物を背負い、ペンダントを確認した。

「2日空けるけど、絶対帰ってくるから……。行ってきます！」

僕は3人に満面の笑顔を向け、朝日を迎えながら家を出る。

午前6時の事……。

「よお……リンク……」

朝早く学校に集合したクラスメイトの中で、唯一眼が覚め切れていないフロッティ。

「お、おはよう。眠そうだね」

「今日の事が気になって眠れなかった……」

フロッティは荷物を肩に、眼をこする。

「太陽の声でも聞きなさい。すぐに湖面ねむしから上がれるわよ?」

リアはフロツティの頭を掴み、無理矢理太陽に向かせた。

「うお、眩し!」

「・・・起きた?」

顔を手でかばうフロツティに、僕が声をかけてみる。

「お、おう。リアのおかげで何とか・・・」

フロツティはフルフルと頭を振って、視界のチラつきを消した。

リアもそれが分かると小さな本を右手に、左肩に荷物を背負い、クラス専用のバスへ乗り込む。

・・・本読んでたら、酔うよ?

僕とフロツティもバスに乗り、リアと通路を挟んだ反対側の席に座った。

僕とリアが通路側、フロツティは僕の隣で窓側。

「全員乗ったか?」

先生が一番前に座り確認の声を飛ばすと、元気な声が周囲から沸いた。

その声を確認した運転手が、バスを発進させる。

「先生、何かしましょうよ」

クラスメイトの1人が退屈そうに足をバタバタさせ、先生に遊びを促した。

「フッフッフ、そう言うと思ってな、こんな物を用意した」

先生は何処からか、スケッチブックをマジックペンを取り出す。

・・・?

皆の頭上にクエスチョンマークが浮いたが、リアはクスツと笑いパタリと本を閉じた。

分かったのかな・・・?

「む、リアファルは分かったようだぞ。これで何をするのかという
と、‘絵しりとり’だ！」

せ、先生って微妙なところ突くよなあ・・・。

「絵えええ!?!」

「ええええ!?!」

「何故に絵!?!」

クラスメイトからダジャレの混ざった声が響き、僕は少し苦笑する。

「それじゃ、回していくぞ〜」

先生は1枚目に何かを描き、後ろの生徒に回した。

絵しりとりスタート。

「何これ・・・？」

と思ったが、早速止まってしまっ。

「先生上手いだろ！？なあ！」

生徒の呟きに先生がつつこけ、思わず確認するが首を横に振られてしまい、ガーン・・・と落ち込む。

「これで良いのかな？」

生徒も不安を残し、次の人へ回した。

その後は止まる事も無く、リアまで辿り着く。

あ、因みにフロッティが最後で・・・次僕じゃん。

「・・・」

リアは回された絵を見て、マジックペンを使いサラサラを何かを描いていく。

それを隣で見ていた女の子が、すごい！と声を上げた。

・・・何だろ。

リアは小さく笑みを浮かべ、僕にスケッチブックを渡すと再び本を読み始めた。

僕はそれを横目で見ながら、描かれた絵を見て驚愕する。

「すご・・・」

「うお、これ分からねえ方が凄いいんじゃねえか!？」

フロツティはリアが描いた‘木’を見ながら、すげえなと感心した。

恐らく‘き’で回って来た為、リアは‘木’を描いたのだろうか・・・。

リアひどいなあ。

また‘き’で回すなんてえ・・・。

その直後、僕の頭上で電球が灯った。

「フロツティ、大変だと思っけど・・・はい」

僕は‘きつつき’を描いてフロツティに回すと、げ・・・と苦い顔をした。

「お前らいじめか!」

フロツティの声と共に、バスの中で笑い声が響く。

「フロツティ！条件は2文字で最後が‘ん’だぞ！」

「は!？」

先生が意地の悪い笑みを浮かべ、フロツティに更なる条件を追加した。

「あんにゃろっ……」

フロツティは渋々とマジックペンを手に、それを考え始める。

ピコンツと何かを閃いたのが、フロツティは笑みを浮かべて描き始めた。

「これで……如何だあ！」

フロツティはそれを描いて、皆に見せる。

描いた物は……‘金’だ。

「2文字で、最後は‘ん’……。正解だ！」

「イエー！」

先生の声と同時にフロツティが立ちあがって、拳を突き上げる。

全て繋がった事に全員は喜び、歓声を上げた。

因みに先生が描いたのは馬だったのだが、後で全員が確認したところ、象にしか見えなかったらしい……。

全員一致により、先生が更に落ち込んだ事を記しておく。

3・4時間バスは走り続け、緑豊かな別荘地へ到着した。

・・・別荘地？

「先生、ここって別荘ですよね？」

僕が不思議に思って先生に尋ねると、コクンと頷き返されてしまう。

「先生の友人が金持ちでな、旅行費渡したら難なくOKくれた訳だ」

「はあ、なるほど……」

「喜べ！別荘は広いぞ！」

納得している僕から視線を外し、先生はバスを降りた皆に声を張り上げた。

それを聞いた者達の中で、我先にと林の中へ走っていく生徒もいる。

フロツティは僕と行く様子で、珍しく動かなかった。

リアは先程から読書を続けており、バスには見事酔わなかった様子。

残った僕達は先生と共に、林の中へと入っていく。

道はきちんと舗装されていたが、それでもやはりデコボコしている。というのに、リアは本を読みながらでも平然と歩き続けた。

時々、道の上まで伸びてきた木の枝を、本から視線を上げずにスイスイと見えているように避け、先生もそれには驚いている。

「かなりのもんだな・・・」

コソリと僕に耳打ちする先生に、思わず苦笑してしまった。

そうこうしているうちに、別荘に辿り着く。

「こいつあでけえ・・・」

フロツティも別荘の大きさに唖然とし、ボクツと見上げていた。

先生は別荘の鍵を開け、皆を中に入れる。

中は左右対称で、中心はちょっとした空間になっており、壁際に個室の入り口と思われる扉がいくつも並んでいた。

一番奥に階段があり、左右どちらも2階に上がれるようになってい
る。

2階も恐らく個室だ。

ここは中央リビングと呼ばれるらしい。

「部屋の数は16! 2人1組になって使用するように!」

先生が指示すると、リアはバスで隣に座っていた女の子と共に、1階の部屋へ入っていく。

「女子は1階! 男子が2階だぞ!」

先生がはしゃぐ皆に声を荒げた。

僕とフロッティは右の階段を上り、2階の一番奥にある部屋へ入る。

「お、結構広い!」

「確かに」

ベッドが2つ用意され、中央にテーブルもあった。

窓からは森林を眺める事が出来る。

僕達はベッドのそばに荷物を置き、中央リビングに戻った。

皆も集まっており、先生から次の指示を聞く。

何でも、この別荘から少し行ったところにキャンプファイア専用の広場があるらしく、今夜はそこで夕飯だとか・・・。

今は11時半なので、それぞれの個室もしくは中央リビングで、各自持ってきた弁当を食べる。

その後は別荘内で自由行動だ。

「何か質問はあるか？」

先生が最後の確認をするが、誰も異論は無い。

「では昼食！」

その言葉を聞くや否や、皆が散らばる。

「何処で食べる？」

「部屋で良いだろ」

僕の問いかけにフロッティは迷わず答え、僕達は2階の個室へ戻った。

この後の自由行動で何をするか話し合いながら、パクパクと食べ進む。

「トランプ持ってきたけど・・・」

「おお、リンクナイス！」

僕がボソリと呟いた途端、フロッティがグツジョブ！とサムズアップして来た。

あはは、と苦笑しながら僕達は昼食を終える。

「如何する？リアも誘おっか」

「そだな」

2人だけではつまらないだろうと思い、リアを呼ぶ事にした。

1階に降りて、リアがいる部屋の扉をノックする。

—— コンコンッ

「・・・はい」

少しして、リアが本を片手に扉を開けた。

「暇？」

単刀直入に僕が聞いてみると、リアは僕が右手に持っていたトランプを一瞬見て、笑みを浮かべる。

「どちらでも」

「んじゃやるっ」

「良いけど・・・強いわよ？」

リアの笑みに僕とフロツティは、え・・・と顔を固めた。

「だあ〜っ!」

「つ、強い……」

フロツティはトランプを上投げて、僕はあり得ないようにリアを見つめた。

リアは本を読みながらも、七並べを見事に勝利する。

4と6を全て止められてしまった。

「こういうのは、頭を使うのよ。リンクは頑張れば出来るでしょうけど、フロツティは無理かしらね」

「ぐ……認めたくないけど、認める……」

フロツティは頂垂れながら小さく呟いた。

そのやり取りを、苦笑いしながら見ている僕。

その後、ババ抜きもしたのだが再びリアが一番抜け。

「七並べは分かるけど、何でババ抜きまで……？」

僕が不思議そうに尋ねてみると、リアはクスリと小さく笑い本を読みながら答えてくれた。

「自分の手札、回って来たカード、抜けていったカード……。それらすべての番号、マーク、配置を覚えておけば簡単よ……」

「全っ然、簡単じゃない……」

リアは淡々と言って見せるが、僕はその頭脳に呆れてしまう。

その後も連勝され、夕飯の時間となりキャンプファイアのもとへ向かった。

ユラユラと燃える炎と、音を立てて弾ける木。

フロツティは楽しそうに先生とやり合っていたが、僕は炎を見ながらボクツとしていた。

炎、か……。

何だろ、何か思い出せそうなのに……記憶の渦から出て来ない……。

「無理に思いだそうとしても、苦いだけ……」

僕の隣で本を呼んでいたリアが、横目でそう言った。

「……え？」

「虚ろな眼は、記憶を掘りだそうとしている証拠……。自然に思っ
いだした方が、気分は楽よ」

リアは何事も無かったかのように、再び本を読み始める。

「……そうだね。ありがとう」

「……」

リアの言の通り、もう少し待ってみようかな・・・。

出てくるかもしれないし、ね。

4話：短期旅行の楽しみ（後書き）

太陽の音が響き始める朝の霜。

忍び寄るは罪を犯した影・・・。

5話・表裏一体の世界（前書き）

5話、参りましょうか。

5話：表裏一体の世界

<Side リアファル>

「・・・」

午前4時頃。

私は布団から体を出し御手洗いに向かい、鏡の前に立って思いに耽る。

・・・如何して、眼が覚めたのかしら。

鏡に手を当て、映る自分の顔をなぞった。

思い出すのは、深い深緑の色。

吸い込まれるような・・・オレンジ色の瞳。

元気がしらね、あの子・・・。

私は御手洗いから出て、部屋に戻ろうとした——ッ!?

人影が3人。

しかも子供じゃない・・・大人?

大人達の脇には、如何やら薬か何かで眠らされたクラスの女の子達
が。

あの3人、確かニュースで言ってた銀行強盗の……。

人を殺した、とか言ってたわね。

最悪だわ……。

私は素早く扉の陰に隠れたが、1人に見つかってしまい眠らされた。

眠らされる直前、2階の手すりの陰に誰かいたような気がする。

2階の一番奥……。

リンク……？

<Side グラムドリンク>

——コトッ

僕は、何かの物音で目を覚ました。

隣のベッドでは、フロッティがいびきをかいて眠っている。

……あれ？

気の所為だったのかな……？

扉を開けて中央リビングを見下ろすと、人影が見える。

先生・・・じゃない！

すぐに手すりの陰に隠れ、状況を把握した。

つて、あの人達テレビで！

あ、リアが！

とりあえず見つからないように・・・！

僕は息を殺し、3人の大人達が出ていくのを見守る。

3人共、男性のようだ。

「人質はこんなものか・・・」

「4人もいりゃ、十分だろ。察サツがしつこく探し回すから、人質まで準備しなきゃいけねえじゃんかよ・・・」

「それでは、私達の隠れ家へ帰りましょうか・・・」

3人はリアを含めた4人の女子を連れ去り、林の中に消えた。

僕はぐっすりと寝ているフロツティを、申し訳なく思いながらも叩き起こす。

「起きて！」

「んあ？」

半目の状態でフロツティが体を起こした。

「リアがさらわれた・・・！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・何iiiiiiii!?!」

僕の言葉にしばしの沈黙だったフロツティだが、すぐさま眼が覚める。

「如何した!?!」

直後、先生が驚いた顔して飛び込んで来る。

ナイスタイミング!

<Side リア>

「っ・・・」

私は、何処かの倉庫のような場所で眼が覚める。

「あ、リアちゃん」

クラスメイトの女子が大丈夫と声をかけてきた。

4人全員、両手を後ろに回されて縛られている。

「無事よ、怪我はしてないから・・・」

私は倉庫内を見回して、何か鋭い刃のような物がないかと探してみ
たが、何も見つからない。

そもそも、ほこりが被っている倉庫内は何も入っていなかった。

「ここ、何処なんだろ。気づいたら変なところにて・・・」

1人の女の子がボソリと呟く。

3人に事を言おうかと思ったが、不安にされるのも如何かと思いつ
口をつぐんだ。

「何処かっていうのは、分かりそうね・・・」

私は立ち上がって窓の外を見る。

朝方で薄い霧がかかっているが、遠い向こうに私達の別荘が見えた。

グラスタを呼び出して壁をぶち壊そうとも考えたが、3人に気づか
れる可能性がある。

私達のグラスタ相手は、まだ戦闘経験が薄い。

大人のグラスタには敵わないだろう・・・。

「ねえ、グラスタを呼び出して脱出しましょうよ」

思っていた事を丁度1人が述べる。

「やめておきなさい……」

「如何して？」

「相手は大人。勝算は薄いわ……」

私が外を見ながら答えると3人は落ち込んだが、直後扉が開かれた。サングラスに鼻の下まで布で覆った、背の高い人。

「お、全員起きてんな。悪いが人質役をしてもらうぞ」

「っ……」

その言葉に、思わず気の弱そうな女の子が息を漏らす。

「ちよつといいかしら……？」

私は窓の外を見ながら、その人に時間を尋ねた。

「……午前6時だ」

その人は、怪訝な顔をしながら腕時計を見て答えた後、扉を閉じて姿を消す。

「6時……あれから2時間か……。そろそろね」

私は、リンク達が気づき私達を捜索している事を踏まえて考え、行動を起こすべきだと頷いた。

全身に蒼いゴッターを纏い、それを縛られた手に集中する。

「何を……」

3人共、不思議そうに見ているが気にせず、頭の中に短剣を描いた。

ゴッターがそれを形作り、短剣が作られる。

「すっごくいい……！」

1人が、声を出るだけひそめて声を出した。

——ブチッ

その短剣で全員の縄を斬り、自由になる。

鞘も作り、腰裏のベルトに刺しておいた。

「さあて……？」

手首を回して緊張をほぐし、窓を開けて全員そこから脱出する。

「我が乞うは鋭き視力。逃す事無く敵を射よ……」

蒼いゴッターが頭上で渦を巻き、茶色の巨鳥が現れた。

「ファルケ
鷹……！」

私達はファルケに乗り、天へ舞い上がる。

丁度飛び立った頃、強盗団が気づき小屋から飛び出していた。

「ファルケ、仲間を探して」

『はい』

私はファルケの頭の方へ歩み寄り、指示を出す。

ファルケの視力は折り紙つきだ。

『見つけました……。リアファル様、後方より敵が参ります。指示を……。』

ファルケはリンクのヴォーゲルを発見したが、後ろから強盗団がグラストの巨鳥を使って飛行してくる。

「無視して。ヴォーゲルと合流する事が最優先」

『了解しました……。』

ファルケは大きく羽ばたき、速度を上げる。

「リア〜！」

「無事か〜!？」

ヴォーゲルの上に乗ったリンクとフロツティが、こちらに手を振っていた。

小さく振り返り、後ろを確認する。

距離は縮まっている事を知り、女の子に声をかけた。

「あなた、確か巨鳥のグラスタがいたわね・・・？」

「う、うん」

「すぐに呼んで」

「分かった」

女子は私の言葉に頷き、巨鳥を召喚する。

「移つて。先生のもとに戻りなさい」

私以外の女子はその巨鳥に移動し、ファルケはヴォーゲルの隣で滞空した。

「リアちゃんは・・・？」

「いいから、行きなさい・・・！」

私が口調を強くして命令すると、女子は頷いてこの場に私達だけが残る。

「はっ！讓ちゃんやってくるねえ！」

強盗団の1人が不気味な笑みを浮かべ、私を睨んだ。

「譲ちゃんはやめていただけるかしら・・・？あなた達、強盗をやら
かした悪者さんでしょう？」

「・・・何が言いたい」

冷静な1人が私を睨み、問いただす。

私は何も答えず、腕を組んだ。

双方それぞれの巨鳥の上に立ち、対峙する。

「まったく、裏切り者を始末したと思ったら、譲ちゃんに顔見られち
まうしよお・・・。ついてねえな」

陽気な1人がサングラスや布を取り、顔を露わにした。

裏切り者を始末・・・？

という事は銀行強盗は本当の狙い、つまり殺人を隠す為の・・・。

他の2人も顔を覆っていたそれらを取る。

あの陽気な1人は黒紫の髪に紫色の眼。

ゆったりと落ち着いている1人は、藍色の髪に深い藍あおの眼をしてい
る。

そして、リーダーを思われる冷静な者が、茶髪に片目だった。

右目に眼帯を付け、左目から魂が宿っていないような、沈んだ茶色

がこちらを見据えている。

「顔を見せたって事は、生かす気は無いつて事で良いのかな・・・？」

リンクが笑みを浮かべながら問いかけると、リーダーが頷いた。

すると、遠くから先生達がグラスタを使って飛んで来る。

「・・・悪いが、来てもらっぞ」

状況が悪いと判断する強盗団のリーダー。

隻眼の男が懐から瓶を取り出し、中に入っていた紅い粉を周りに振りまいた。

「何・・・？」

私達が粉を見てみると、周りの景色が歪み始め荒れた大地に変化する。

何処・・・？

先程の深い山々は、何処にも見当たらない。

「ここが何処だか分からねえって顔してんな。教えてやるよ。ここはアンダーヴェルト！グラスタが住む世界さ！」

黒紫の髪をした男が、両腕を広げてあざ笑う。

アンダー・・・ヴェルト・・・！？

<Side グラムドリンク>

「おお、そっぴやまだ名前言ってなかったなあ……。俺は剣のソーサラー、グラディウス」

陽気な男が名を名乗る。

「短剣のソーサラー、ステイレット……」

藍色の髪をした男もそれに習い、同じく名乗った。

「槍のソーサラー、ゲイボルグだ」

最後に隻眼の男が呟き、僕等に向き直る。

「そちらさんは？」

グラディウスがニヤリと笑って、僕達の名を尋ねたが、

「教えたくないわね……」

リアが苦い笑みを浮かべながら、答える事を拒否した。

「ひでえな。こっちは名乗ったってのに……」

「……。はあ。リアファルよ」

「フロツティだ」

「グラムドリンク・・・」

僕達も礼儀に習い、名を返す。

ゲイボルグが片眉を上げ、怪訝な顔をした。

何か引つかかる事でも言っただかな・・・？

ゲイボルグの視線は僕に向けられている為、思わず身構えてしまう。

双方の巨鳥は地上に降り立ち、それぞれ地面に足をついた。

直後、ゲイボルグ達がゴッターを纏う。

ゲイボルグは黒、グラディウスは紫、ステイレットは藍色のゴッターだ。

「我が乞うは黒き鉤爪。刃もろとも天を裂け、」

ゲイボルグの隣に、黒い毛を纏う獅子が現れる。

「ラーヴェ
獅子」

ラーヴェは低く唸り、その場に腰を下ろした。

「我が乞うは貫きし刃。心の臓を射とめよ・・・！」

グラディウスの頭上に黒と白の羽毛を持つ、立派な嘴の鳥が姿を現

し翼を広げて滞空する。

「シューーフエ
鳴……！」

「キエエ……」

シューーフエは声を出して唸り、僕達を睨んだ。

「我が乞うは深き群青……。その身を広げ天を覆え……」

ステイレットの藍色のゴッターが渦巻き、深い青を湛えた巨鳥が現れる。

「インディヒ
藍……」

ステイレットはインディヒの頭をなで、闘う気はほとんど無いように思えた。

ゲイボルグはここまで運んできた巨鳥に合図し、帰って良しと声をおくる。

巨鳥は翼を広げて飛び立ち、遙か彼方へ消えた。

勝てる……？

いや、無理……！

フロツティが紅いゴッターを纏い、詠唱を始める。

「我が乞うは紅き炎。脆い物全てを噛みちぎれ……」

フロツティの隣に、紅蓮の狼が姿を現した。

「^{ヴァグ}紅狼！」

「オオウ・・・！」

ヴァグーは低く唸り、いつでも駆け出せる状態で待機する。

「おうおう、やるかあ？」

グラディウスは紫色のゴッターで剣を作って右手に握り、不気味な笑みを浮かべて挑発した。

その一言にフロツティがムカッと来たようだが、僕が手で制す。

「挑発に乗らないの」

「分かってる・・・」

そうは言うが、その額には怒りのマークが浮かんでおり、堪えてい
るなと感じた。

< S i d e ゲイボルグ >

「如何すんよ、ゲイボルグの兄貴」

グラディウスが剣を肩に担ぎ、あいつらを眺める。

俺はしばらく考え、始末するか検討した。

「・・・半殺しで良いだろう。殺すなよ」

「ええ〜」

「理由は・・・？」

つまらん！と喚くグラディウスを無視して、ステイレットが疑問を投げかけてきた。

まだ気になる事がある、と返す俺にステイレットは頷く。

こいつはグラディウスの馬鹿と違って頭が回るし、指示に従う忠義もあつた。

そこは良いのだが、もう少し口を訊いても良いとは思つが・・・。

俺も人の事は言えんか。

「何で殺さねえだ？」

「今言つただろう。気になる事があると・・・」

「ケチ」

「やかましい」

いちいち気に障る奴だな・・・。

文句を呟きながらも、グラディウスは剣を地面に突き立て支えにする。

「そんじゃ、行つくぞぉ・・・」

完全にやる気無しだな、こいつは。

すると、向こうの・・・リアファルとか言ったか。

女が腰に刺していた鞘から短剣を引き抜く。

それを見たステイレットが、ゴツターで鋭い短剣を2本作り上げ、右に順手で左に逆手で握った。

ステイレットは短剣の使い手だ。

短剣を使えば右に出る者はいないだろう。

「構え・・・」

俺が右手をスツと上げると、ラーヴェが腰を上げて態勢を低くした。

さあ、開戦だ・・・。

5話・表裏一体の世界（後書き）

目の前にあるのは、絶対的な力の差。

その壁は高く、少年達は苦しみに足づくであるじ……。。

6話・垣間見る裏の組織（前書き）

6話、参りましょう。

6話・垣間見る裏の組織

<Side グラムドリンク>

「武器を作りなさい」

リアが短剣を右手に、僕とフロツティに指示した。

「う、うん」

武器を作るのは初めてだったが、一応授業で習っていた為、意識を集中してイメージする。

「やっぱりこれだろ」

フロツティはうん、と頷き剣を作り上げた。

僕は……。

イメージしていると長い物が浮かび上がり、僕は槍を作り上げる。

すると、ゲイボルグがゴツターを纏い、槍を創生した。

僕と同じ……！

そういえば槍のソーサリーって……！

「勝算は薄いわね……」

「同感……」

「そうか？」

リアの言葉に頷く僕だが、フロツティはプラス思考で考える。

「1つ質問良いかな？」

僕は気になる事があって、ゲイボルグ達に問いかけた。

「……何だ」

少々不満げなゲイボルグだったが、僕は怯まず質問を投げかける。

「おじさん達、裏切り者が如何とか言ってたよね？つまり組織的なグループって事でしょ？組織名、何て言うの？」

僕がそういうと、何故かグラディウスの眉間にしわが寄った。

「お、おじさんて……俺まだ20代なんだけどお……？」

「……もうすぐおじさんだね」

「やかましいっ！」

小さく呟いた僕の声を敏感に聞き取り、グラディウスがブチッと怒る。

ゲイボルグは僕の質問に少し悩んでいたが、口を開いた。

「組織名……『ファイオ・アストレ闇の大鷹』」

ゲイボルグは静かに答え、右手を振るう。

途端、ラーヴェが駆け出した。

「獅子には狼つてか、ヴァグー！頼むぞ！」

『おう！』

接近してくるラーヴェにヴァグーが挑み、インディヒにファルケ、シュニーフェにヴォーゲルが対峙する。

リアとステイレット、フロツティとグラディウス、僕とゲイボルグが相対した。

それぞれ空間を取って、相手と向かい合う。

「確認するが……グラムドリンクと言ったな？」

「そうだけど……？」

ゲイボルグが槍を右手に問いかけてきた為、頷き返した。

「そうか。それが分かれば良い……」

ゲイボルグはそれで満足したのか、左手を腰の後ろにして態勢を落とし、槍を構える。

隙が無い……！

こっちはつい先程まで、戦闘をした事が無い普通のソーサラーだ。
達人に勝てる訳が――。

――ブオンツ！

「ッ!?!」

考えていた最中にゲイボルグがこちらに急接近し、槍を突き出してきた。

ほぼ反射的に体を右に反らす。

かと思えば、唸りを上げて槍の穂先が向かってきた。

「っ・・・!」

手を動かして、穂先を僕が持っている槍の柄で弾く。

――タンツ

ゲイボルグは人間とは思えぬ跳躍力で後方へ跳び退り、口元に小さな笑みを浮かべた。

「よく今を防いだ。槍を・・・否、武器をその手に持つのは初めてだろう?」

「まあね・・・」

普通に返してはいるが、心臓ははち切れそうなほど脈打っている。

これが、命のやり取り・・・！

防げなかったらと思うと、思わず冷や汗が背筋を伝った。

「我等が組織に眼を付けられた事、後悔せよ・・・」

——フツ・・・

ゲイボルグが静かに呟いた直後、姿を消す。

何処・・・！？

「如何した・・・？何処を見ている」

「ツ！？」

気づけば僕の背後にいて、穂先を僕の首筋に突きつけている。

「もう一つ確認したい・・・。この問いの答えにより、お前の運命が変わると思え」

「な、何？」

「グラムドリンク、お前に兄弟はいるか・・・？」

兄弟・・・？

何を聞きたいんだ、この人は・・・。

「正直に答える・・・」

ゲイボルグの右目が怪しく輝き、僕に殺気を射ていた。

「・・・いるよ」

「兄か？」

「そうだけど、何か問題でも・・・？」

僕が怯まず問いかけたところ、ゲイボルグは静かに笑う。

「クク・・・！そうか、兄がいるのか・・・！」

「な、何さ」

変な奴だなと思いつつも、笑われる理由を知りたくて再び問いかける。

が、ゲイボルグは僕の首筋から穂先を離し、眼帯を付けた左目を押しさえながら何処かへ歩いていった。

「・・・こっちは答えたんだよ！？」

僕が大きく声を張り上げると、ゲイボルグは歩を止めて振り返り、

「いつか理解出来る時が来るだろう。俺が問うた事を忘れるな・・・」

」

一言言い残し、ラーヴェを呼ぶ。

そして僕に紅い粉の入った瓶を投げ渡し、ステイレットやグラディウスを呼んで、彼等は飛び去って行った。

僕ははっとなり、皆の状況を確認する。

「フロツティ、リア！怪我は！？ガラスタの皆も！」

僕の声に反応し、皆が集まった。

「俺は右腕を少し・・・」

「私は左腕ね」

フロツティは右腕、リアは左腕に切り傷を負っていた。

ヴァグーは胸の部分に噛みつかれた跡があり、血が滴り落ちている。

ファルケは羽が乱れている程度だが、ヴォーゲルは首筋に突き刺された跡があり、白銀の羽が紅く染まっていった。

「ヴォーゲル！」

地面に崩れるよう倒れたヴォーゲルに駆け寄り、傷口の様子を見る。

『不意を突かれた・・・。主は無事か・・・？』

「僕は平気だから、自分の事を心配しなよ！」

如何して人の事を心配するのさ……！

自分の体が傷だらけなのに……。

僕は傷口の様子を確認しながら、ヴォーゲルを叱る。

『なら良い……。皆みなの傷を回復せねば……。』

ヴォーゲルは倒れながらも輝く尾羽を上げ、癒しの風を流した。

銀色の風が、僕達の間を縫うように駆け抜けたと思うと、皆の傷が回復する。

グラスタも含めてだ。

ヴォーゲルはムクリと起き上がり、疲れたように一度思い切り翼を広げ、猫のようにブルブルと頭を振った。

『む……主、その手に持つのは何だ？』

「え、ああ、これ？なんかゲイボルグが置いてったんだけど……」

ヴォーゲルに問われ、僕は改めて瓶をよく見てみる。

「そんな物持つてて良いのか？」

フロツティが疑い深げにジューツと瓶を眺め、むう……と唸った。

リアは僕に手を伸ばし、瓶を受け取る。

「これ、私達がこちらへ来る時に、あのリーダーさんが振ってた物じゃない？」

「って事は、アロンダイトに帰れるって事で良いのかな？」

「お、マジか」

僕が首を傾げて呟くと、フロツティの瓶を見る目が変わった。

リアは右手に持っていた短剣を腰の鞘に納め、瓶のふたをキュポンツと空ける。

フロツティもゴツターで鞘を創生し、カチンツと鞘の中に剣を納めた。

僕も2人に習い、槍の穂先を覆う小さな鞘の形をした、革製の物を作る。

シュツと中に入れ、穂先を覆った。

「振ってみる？上手くいけばアロンダイトに戻るけど・・・」

リアは疑問形で返しておきながら、勝手に振ってしまう。

粉が舞い散り、周囲の景色が歪んだ。

かと思えば、森林の中にいる。

グラスタ達もアロンダイトに移動したようだ。

「戻っていいよ。今回はありがとつ、ゆっくり休んで」

『主も気をつけられよ……』

ヴォーゲルは僕に注意を促し、グスタ達はアンダーヴェルトに帰還する。

「さて、先生達に会ったら何て言いましょうか……」

リアは口元に笑みを浮かべて歩き出すが、僕とフロツティはう……と小さく呻いた。

わ、忘れてた……。

何て言おう。

「おーい！こら、やっと見つけたぞっ！」

間の悪い事に、先生がこちらに走って来る。

うわ、如何しよう……！

僕とフロツティは冷や汗ダラダラだったが、リアは平然としていた。

「こらあ！お前ら探したんだぞっ！」

当然の如く説教が始まる。

何処に行っていたんだと問われ、僕は困り果てるが、リアは口を開いた。

「先生、女子3人は如何しました？」

「は？あ、ああ。あの3人はいきなり大人に襲われて、顔も覚えていないそうだが、とりあえず今は別荘にいる」

「そうですか……。なら良いのですが、私とその3人は恐らく、ペンション荒らしか何かのグループに襲われたんだと思います。後で駆けつけてくれたリンクとフロッティも、勿論私も顔は見ていませんが、向こうのグラスタの攻撃を食らい、墜落してしまつたよう
で気を失っていました」

「そ、そうか。怪我は無いな？」

リアの真実5割・嘘5割の見事な説明に、僕とフロッティは呆然とする。

先生は僕達の体を大まかに確認し、怪我が無い事を知つて安心した。

「とにかく別荘に戻る事！良いな！？」

「はい」

「あ、分かりました」

「へ〜い」

リアと僕がそう返し、フロッティの気の抜けた返事が先生の耳に入る。

「フロツティ君、返事はシャキツとしなければならんよ？」

先生はフロツティの頭を拳で挟み、毎回恒例のグリグリ攻撃をお見舞いした。

「あだだだっ！は、はいっ！分かりましたあっ！」

「うむ、よろしい！」

「し、死ぬ・・・！」

やっと解放されるフロツティに僕は心の中で同情し、別荘へ向かった。

別荘に戻ると、皆が、

「大丈夫だった!？」

とか、

「怪我ねえか!？」

とか、

「何処行つてたの!？」

とか、

「犯人の顔見たか!？」

ほとんどリンクとリアが答えてくれたけど、この時間が面倒くさくて仕方が無い。

「そうか。よし、質問終了！部屋に戻ってくれ」

「っしやあー！」

先生のその一言に待ってましたと立ち上がり、部屋を出ていく。

「やっと終わった」

「本当。無限に続くのかと思ったわ」

リンクとリアも部屋を出て、自分の個室へと散った。

その後は短期旅行も気を取り直して再開され、何とかその日も終わりを告げる。

翌朝、俺達は帰りのバスに乗り込んだ……。

< Side ゲイボルグ >

俺達はアンダーヴェルトの拠点に戻り、幹部の1人であり、俺達の司令でもある人物へと向かっていた。

拠点と言っても、立派に出来た城のような建物ではない。

石や岩壁で出来た要塞のような物だ。

厚い扉を開け、要塞内に入る。

「なあ、この格好もついいだろ?」

グラディウスが嫌そうに、強盗用の衣服を示した。

「そうですね……。いい加減元に戻しては如何でしょうか・・・?」

ステイレットもそれには賛同するようで、俺に許可を求める。

俺もうんざりしていた為、頷き返した。

それぞれゴッターを纏い、衣服を組織用の物に変える。

ズボンや上着は黒い質素な物で、その上から革で出来たような一枚の広いマントを羽織る。

全て真っ黒に彩られ、隠密行動がしやすい。

要塞内の通路を歩き、1つの扉の前に立つ。

「そついや、あいつがいねえけど3人で良いのか?」

グラディウスがもう1人のメンバーを気にしたが、如何でも良いだろうと切り捨てた。

あいつはよく抜けているからな……。

——コンコンッ

「・・・入ってくれ」

中から俺達よりも若い声が聞こえ、扉を開ける。

中には作戦会議用の広いテーブルと椅子しか無く、一番奥の椅子に一人の少年が座っていた。

俺達の司令であり、幹部の一人、ヤルングレイプ司令官だ。

俺より年は下だが、頭も切れるし剣術の腕も確か。

俺は俺で慕っている上官だ。

というより、組織内で慕っているのはこの人だけだが・・・。

「只今帰還しました・・・」

「御苦労さん」

それに、この方は幹部の中で唯一俺達のような一般兵の面倒を見られる。

他の上官は決してそんな事はしない。

司令下にいない者でも、ヤルングレイプ司令官を好んで移動してくる事もある。

といっても、この司令官は人を見る眼がある為、ある条件を満たす

兵でなければ入れないが……。

俺もその条件は知らない。

「息災で何より……。状況報告をどうぞ」

「のですが……この2名には席を外していただきたい」

俺は両隣にいたグラディウスとステイレットを横目で見て、司令官に合図を送る。

「君がそう言うなら……。外してくれるかな？」

「はい……」

「じゃあねえか……」

司令官を2人も慕っている為、逆らう気は全く起きない。

2人が扉の向こうに消えたのを確認し、俺は口を開く。

「司令官には……。弟がいましたね……？」

俺の一言で、司令官の眼が変わった。

少し鋭くなった気がしたが、それも一瞬でもとに戻る。

「それが如何かしたのかな……？」

「いえ……。今日、お目にかかったもので……」

そう言うと、驚いたように眼を見開く司令官。

「会ったのかい？」

「アロンドイトで偶然に……。こちらに連れ込んで一戦交えましたが、司令官と似ていて反射神経がよろしいようですね」

「……そう、か」

司令官は懐かしいような笑みを浮かべ、席を立つ。

「因みに、アロンドイトへ帰したのかい？」

「一応は……。瓶を渡しておきましたので、問題は無いかと……」

「はは。本当に君は優秀だね」

司令官は笑いながら扉へ向かう。

「今、弟と会うには早すぎる。向こうに返したのはありがたいな……」

「光荣です」

「報告は……？」

「以上です」

「うん。帰ってよし」

司令官は扉を開け、帰還の許可を出した。

俺は一礼して部屋を退出し、グラディウスとステイレットを連れ、要塞内の個室へ帰った……。

6話・垣間見る裏の組織（後書き）

分からぬならば、知識を拾え、聞け。

その人物は本のように膨大な量を、身に染み込ませているのだから・
・。

7話：4人のソーサラー（前書き）

ええっと、ここで両チーム4人勢ぞろいですね。

では7話、参りましょう。

7話：4人のソーサリー

<Side グラムドリンク>

午後4時半頃。

「ただいまぁ・・・」

いろいろな事があつてかなり疲れていたが、家に帰るとその疲れが一気に襲つて来る。

『おかえり』

遊びから帰つて来た時、母にいつもお菓子をもらっていたが、今は自分で用意するのだ。

何処か寂しさを感じながらも、テレビを付けてニュースを確認する。

強盗団の事は何も知らされていないかった。

それもそうだよね。

リアは、ただのペンション荒らしって言ったんだから・・・。

「あ、そういえば・・・」

僕はポケットから瓶を取り出す。

リアが持っている僕に渡したのだが・・・。

これを如何しろと？

まあ、とりあえず明日は土曜だし・・・リアやフロッティと相談しようか。

僕はポケットに瓶をしまい、ゴロンッとソファに寝転がった。

——プルルルツ、プルルルツ

「・・・電話？」

電話の着信音が部屋の中に木霊し、僕はノソリと起き上がる。

電話の受話器を取ろうとして、手を止めた。

僕の家に電話をかけて来るという事は、僕の知り合いだ。

フロッティか、リア。

もしくは学校から、という事なのだが・・・。

「フロッティからだったら、如何しよう・・・？」

あいつの電話はかなり変わっていて、心構えが重要である。

僕は意を決して受話器を手に取り、耳に当てた。

「はい、グラムドリンクです」

『どしたらさんっ』

受話器からフロッティの声が聞こえた途端、僕は大きなため息を吐く。

「そのやり方、やめてよね〜」

『はは、いいじゃん。こっちは面白いんだからよ』

「面白いのはそっただけでしょ……」

向こうから電話をかけて来たというのに、先程みたいに疑問形で返してくる事がある。

他にも、

『グランですが』

とか、

『ああ、兄貴？』

とか、

『声大きいぞ〜』

などと、いきなり訳の分からん事を言い出す為、こちらは心の準備が欠かせない。

ある程度の事で動揺してはいけないのだ。

「で、何の用？」

『んだよ連れねえな』

「僕は魚じゃないぞ……」

『「連る」と「釣る」の間違いじゃねえか？それ……』

フロツティが思わずというように、突っ込んでくれた。

……冗談だって。

『あのさ、リアから電話貰ったんだけど、明日午前10時頃でいいから、私の家に来て』だってよ』

「リアが？……どして？」

『知るかよ。とりあえず伝えたからな』

—— ツー、ツー……

切るの早いなあ、フロツティ。

にしても、何で行かなきゃいけないんだろ……。

僕は受話器を戻し、考えながらも夕飯を作り始めた。

が、

「あちやゝ……」

冷蔵庫の中は、最近買い出しに行っていなかった為、ほとんど空に近かった。

仕方ない、と僕は買い出しに出かける。

「大漁大漁」

僕は何処ぞの漁師のような言葉を吐きながら、上機嫌で帰路に着く。薄暗くなってきた道を歩きながら、真っ直ぐ家へ向かっていた。

——コツ、コツ……

背後から足音が聞こえた為、ふと振り返ってみる。

「ツ……!?!?」

そこにいた人物を見て、僕は驚愕に眼を見開いた。

全身を黒い衣服に包み、眼帯をかけた男性。

ゲイボルグ……!

「……アロンドイトに帰っていたようだな」

「おかげ様で……」

僕は一言そう返し、警戒心をむき出しにする。

「感謝してよね」

僕がそう言つと、ゲイボルグは怪訝な顔をした。

「ペンション荒らして事にしといたから」

「・・・ほう。ずいぶんと優しいんだな」

「良いの良いの。僕達が捕まえるから」

そついう事が、と納得するゲイボルグは口元に笑みを浮かべ、背を向けた。

何事も無かつたかのように歩き出し、路地を曲がる。

——ダッ

僕は急いで後を追ひ、交差点を曲がったが誰もいなかった。

奇妙な帰り道を終え、僕は家に着いていた・・・。

<Side リアファル>

——ピンポーンッ

来たわね……。

「はい、いらっしやい」

扉を開けるとリンクとフロツティの2人が立っており、家の中に入れる。

「何で呼んだの？」

リンクが不思議そうに聞いてきたが、2階の私の部屋へ急かす。

ドアを開け、中に入ると1人の少女がそれを迎えた。

「お久しぶり」

「「ああっ！」」

深い緑色の肩辺りまでの髪と、オレンジ色の瞳。

私の従妹、ティルヴィングだ。

従妹といっても数ヶ月しか歳は変わらない。

「ティル、久しぶり！」

「相変わらず元気そうだな！」

私達はティルと呼び、リンクとフロツティがティルとハイタッチする。

「当然よ！フロツティがくたばるまで、私は倒れないわよ！」

「何か酷くねえか!？」

私と違って明るい性格の持ち主の為、フロツティと気が合う。

が、その反面、喧嘩もしばしば……。

まあ、当然よね。

「でも何でティルがいるの？」

リンクが私に問いかけてきたので、私が呼んだからと返答する。

リンクとフロツティの2人そろって、何で？と問われた。

「リンク、あの瓶持つてる？」

「え？あ、うん」

私はリンクから瓶を受け取り、ティルに見せる。

「む、これは……紅い粉だけど……」

ティルは将来学者を目指していて、表裏一体の世界を私達の中で一番理解していた。

ティルにこの前起こった事を話し、この瓶を見せれば何か分かると思ったのだが、無理があったのかも知れない。

リンク達にもそれを説明すると、なるほどと頷かれた。

その間、ティルが興味深げに瓶を眺めている。

「これ……裏渡りじゃない？」

ラケン・ウダーホルト

「……え……？」

思わぬ事に、ティルはそれと思わしき名を呟いた。

「何それ……」

リンクが身を乗り出して聞き返す。

「ラケン・ウダーホルト。アロンドイトとアンダーヴェルトを行き来出来る紅い粉があるって、本で読んだ事があるの。でも、かなり古い本で内容もそんなに覚えてないけど……」

ティルはそう言うけど、この子の記憶力はとんでもないわ。

何せ、あだ名が「本の虫」だから……。

読んだ所を頭に次々と、まるでコンピューターのように記憶する。

特に、自分の好きな本は一字一句間違いないで暗記しているのだから……。

「ラケン……ウダーホルト、か……」

リンクが興味深げに、瓶の中に残っている紅い粉を見つめた。

<Side リンク>

僕は紅い粉を見ていたが、ふいに何かが頭の中を突き抜けた。

「あぁっ！」

——ビクッ

いきなり僕が大声を上げた為、3人が体を小さく震わせた。

「な、何だよ？」

フロツティが問いかけて来るが、僕は昨日の夕方にあった事を3人に話す。

「はぁ！？ゲイボルグに会ったぁ！？」

「如何してもっと早くに思い出さなかったの……」

フロツティは大声を出して驚愕し、リアは額に手を当て呆れていた。

が、ティルはというと……。

「会ったの！？良いなぁ〜！」

とまあ、眼を輝かせていた。

・・・何故喜ぶ？

「私その3人と会った事無いから、早く会ってみたいの〜！」

「会っても碌な事無いよ・・・」

僕は戦闘の事を思い出し、思わず苦笑いを浮かべた。

「あ、そういえばティルって・・・何かこんな感じの剣を習ってなかった？」

僕はふと思い出し、普通の剣が少し曲がった物を手で表す。

「あ、‘刀’の事？うん、習ってるよ」

「カ、カタナって言うの？」

「そう。東の国で昔、‘侍’って人が持ってたんだって。これも本で読んだの」

さ、流石・・・。

何でも知ってるねえ。

「リアが弓で、ティルが刀、か・・・。頼もしいなあ」

僕とフロツティは特に何も習っていない為、この2人に頼るしかない。

にしても、女子に頼るって如何よ・・・？

情けないよなあ……。

「ねえ、これ残ってるけど……まだ使えるの？」

ティルが瓶のを振って、紅い粉をまき散らした。

「ああっ!!」

「何を……!!」

僕とフロツティが思わず叫び、リアは手を伸ばしかけている。

そんな僕達の心も知らず、部屋の景色が歪んだと思ったら荒れた大地にいた。

「「ティルッ!!」」

「「ごめん!つい振っちゃった……あは」

「あは じゃねえっ!!」

舌を出して謝るティルに、フロツティが頭を抱える。

リアはすでに諦め思考だ。

しかも、今の1回で粉を全部使ってしまった……。

ティル、何て事を……。

<Side ゲイボルグ>

俺はアンダーヴェルトの基地にいたのだが、突如俺達の就寝部屋の扉がノックされた。

—— コンコンッ

「・・・何だ」

俺はムクリと体を起こすが、グラディウスは爆睡している。

ステイレットは先程から起きていた。

「緊急任務です」

扉の向こうから聞こえたその言葉に、俺とステイレットは顔を見合わせ頷く。

俺は扉を開け、兵から任務内容を確認した。

内容は・・・。

「アンダーヴェルトへの侵入者排除です」

「侵入者だと・・・？」

「あ、はい。排除と言っても・・・追い払っただけで結構だと、司令官が・・・」

妙に齒切れの悪い兵に怪訝な顔をし、とりあえず向かつと頷いておいた。

「あと、ラケン・ウダーホルトを持っていくようにと……」

「何故裏渡りを……。分かった、向かおう」

俺のその言葉を合図に、ステイレットが立ちあがりグラディウスを起こす。

「何だ……？」

「任務です……。起きてくれますか」

「任務う？おし、分かった」

グラディウスは任務と聞いて眼が覚めたが、ピタツと動きを止めた。

「……如何しました？」

ステイレットが尋ねる間に、兵は自分の持ち場へ帰っていく。

グラディウスは部屋の中を見回した後、ムツとした顔になる。

「なあ、あいつもたまには任務に同行させようぜ。日頃休んでばっかだしさあ」

ああ、あいつの事を言っているのか……。

俺達は4人で隊を組んでいるが、普段はこの3人だ。

あいつは何かと気が抜けているからな……。

「何や？ワイの事、呼んだかいな？」

黒髪で糸目の男が、タイミング良く部屋に戻ってきた。

俺達3人とは少し違う衣服で、異国で‘着物’とか言われているそうだが……。

「シャシュカ……。珍しいな、お前が部屋に帰ってくるとは」

「いつやく、何や知らんけど任務しとおなってなあ。帰ってったら丁度任務が入って来たところやて聞くし……ワイって運が強いんやるか……？」

ふむふむ、などと顎に手を当て頷くシャシュカ。

こいつ、普段は気の抜けた様子だが、隠密行動は4人の中でも一番優れ、刀を使わせれば右に出る者はいないと聞く。

東の国出身だと聞いたが……変わった口調だな。

「……行くぞ」

俺はため息混じりで、シャシュカの腕を掴み任務に向かう。

「置いてくなあ」

その後を、グラディウスとステイレットが続いた。

7話：4人のソーサラー（後書き）

新たに加わる仲間を連れて、双方が動き出す。

相手は強いのか、それとも弱いのか・・・。

8話・予想外は日常茶飯事（前書き）

最後、テイルの予想外の言葉で終わります。

これを予想していた方は、いるでしょうか・・・？

では8話、参りましょう。

8話・予想外は日常茶飯事

<Side ヤルングレイプ>

アンダーヴェルト基地、要塞内司令部。

俺は椅子に座り、アンダーヴェルトの地図をテーブルに広げ、それを眺めていた。

ここには俺1人しかおらず、ゆっくりとしていた。

「見にくいな・・・」

右目を押さえ、小さく呟く。

俺は右目の視力が無い為、ほぼ左目だけで見ている。

右目の視力を無くしてから約1年経つが、左だけで見るといつのもなかなか難しい。

視界が半分しかない。

——コンコンッ

扉がノックされ、入るよう指示する。

兵が1人入って来た。

「報告です。アンダーヴェルトに、アロンドイトより侵入者が現れ

ました」

侵入者という単語に怪訝な顔をし、

「・・・何人？」

「4人の反応があります」

4人、か・・・。

ゲイボルグ隊に任せれば丁度良いな。

「ゲイボルグ隊に緊急指令。侵入者を排除、もしくは追い払えと伝えてくれ」

「はっ」

兵は扉を閉じ、伝令に走って行った。

まさか・・・リンクか・・・？

俺は首から下げているペンダントを握り、歯を噛み締めた。

まだ会いたくないというのにな・・・。

俺のペンダントには紅い宝石が、リンクには蒼い宝石がはめられている。

それぞれ俺が父の形見を、リンクが母の形見だ。

リンク、こちらへ来てはいけない・・・！

お前は幸せを握って良いんだ。

苦しむのは・・・俺だけでいい・・・！

<Side リンク>

『来てはいけない・・・！』

え・・・？

何？

今の声・・・。

懐かしいな、兄さんの声だ・・・。

でも、如何して・・・？

「——ク、リンク！」

「ッ！？」

僕がボクッとしていると、フロツティが肩を叩いてきた。

「な、何？」

「今の聞いてたか？とりあえずこの見つかりやすい荒野から離れて、森を見つけるんだぞ」

「う、うん。聞いてたよ」

本当は全く聞いていなかったが、何とかそれを誤魔化する。

が、移動開始早々見つかってしまった。

あの巨鳥が飛んで来、僕達の前で着陸する。

1人増えているが、ゲイボルグ達だ。

「何故帰って来た・・・？」

ゲイボルグが少し怒り気味に問いかけて来ると、僕は思い切りため息を吐いた。

「こつちに来たくて来た訳じゃないのに・・・」

そう、原因はテイルの行動である。

僕達は巻き込まれた訳であり、故意で来た訳でも無い。

「何だと・・・？」

「あ、いや、こつちの話」

聞き返して来たゲイボルグに、やや曖昧に返しておく。

「そちらさんは・・・？」

リアが変わった服を着ている男性に視線をおくった。

「ワイはシャシユカや。よろしゅうな」

ヒラヒラと手を振るシャシユカだが、これまた聞いた事の無い口調で話す。

「うっわ、もしかして関西弁!？」

それを聞いたティルが、感動して眼を輝かせた。

「カ、カンサイベン？」

「弁当の仲間か？」

僕とフロツティが怪訝な顔を見ると、シャシユカが笑う。

「はは、弁当の仲間って言われたんも初めてやけど、関西弁やて分かってくれたんも初めてや」

「私ティルヴィングって言うんですけど、シャシユカさん、もしかして日本出身なんですか!？」

「せやねえ」

「うっわ、日本人初めて見たあ！」

「おお、喜んでくれるんかいな」

「しかもそれ着物！？すつ〜い！」

「せやる？ええやる〜？嬢ちゃん分かってくれるんやなあ」

「日本出身で着物つて事は、刀も使うんですか！？」

「おお、使うで〜。得意分野や。因みに苦無クナイも使うなあ」

「苦無もですか！？うわ、感動〜！」

テイルとシャシユカ2人だけの世界となり、他の者は蚊帳の外だ。

「・・・おい」

見かねたゲイボルグが、シャシユカの肩に手を置き、会話を止める。

「テ、テイル？」

リンクもテイルの肩を叩いてみるが、完全に感動の極地に入り、呼びかけても返事が無い。

ダメだ・・・。

「おい」

「はうわ・・・」

頭を叩いても頬をつねっても、テイルの顔は輝いたままだ。

「如何しよ……」

僕は従姉であるリアにゆっくりと視線を向けると、毒でも飲ませば？と返されてしまう。

「おい」

ゲイボルグが声を上げ、僕がそちらを向くとあの瓶を渡された。

「さつさと帰れ……」

「ええ、嬢ちゃんともうちよい話、したかったんやけどなあ」

「お前……」

そんな事を言うシャシュカに、ゲイボルグが呆れ切った視線をおくる。

「……冗談や」

「関西人の冗談は冗談じゃないんですよ」

「おお、嬢ちゃん、よお知つとるな！」

何とも言えない会話が続き、本当に敵同士なのかと疑問を抱く一同。

「はい終了。良い子はおうちに帰りましょう」

僕はティルの腕を掴み、子供を相手にする大人のような口調でそう言った。

「ええ〜！日本人に会える機会って今だけなのにい！」

ティルがそう言うのと、

「ほれ見い、嬢ちゃんもああ言うてはるやんか」

シャシュカが笑みを浮かべて、ゲイボルグを肘で突いた。

「知るか・・・」

「薄情やお」

「お前面白いな！」

グラディウスは、変わった性格のシャシュカを気に入り、肩を叩く。

シャシュカ相手はゲイボルグも不慣れらしく、ステイレットも同情して苦笑した。

<Side ゲイボルグ>

どうもこいつはやりずらくて敵わん。

「せめて1回だけ！ね？」

向こうではティルと呼ばれていた女子が、手を合わせて司令官の弟に何かを頼み込んでいる。

「ええ！？いや、無理だから！」

グラムドリンクはあり得ないとばかりに、首を横に振っていた。

「もしかしたら良いかもしれないじゃんかあ！」

「流石に無理だろ、それは」

「もう！フロツティまで・・・！」

言い合う2人を余所に、グラムドリンクとリアファルが話し合っている。

「従姉なんだから、何とかしてよ」

「無理ね。あんなったら、納得がいくまで曲がらない性質たちだから」

向こうの状況がよく分からないが、こちらには関係無いと考え、巨鳥に乗ろうとした。

「あ、ストップ！」

意外にも、ティルヴィングがこちらに声を張り上げて来る。

「何や嬢ちゃん、まだ何かあるんかいな」

「一太刀お願いします！」

ティルヴィングがシャシユカに頭を下げた。

「は？」

「おやおや……」

「何……だと？」

グラディウスはポカンとしており、ステイレットは面白そうに笑みを浮かべ、俺はあり得んと目の前の状況に驚愕する。

「あちゃあ……」

グラムドリンクはやってしまったとばかりに、額に手を当てた。

「うおう、ほんまかい！こりゃ予想外や」

シヤシユカに至っては、顎に手を当てて考え込んでいる。

「あう、やっぱダメですかねえ？私も刀使えるんですけど……」

「おお、嬢ちゃんも使うんかいな！おっしや決まりや決まり、一戦やるか！」

「本当ですか！？」

事態が思わぬ方向へ進んでいく。

「ええ！？ありなの！？」

グラムドリンクも想定外だったらしく、嘘……と呆然としていた。

ティルヴィングは緑色のゴッターで刀を造り、左脇に構える。

シャシュカは、いつでもええよと余裕の表情だ。

腕を組み、全く構える様子は無い。

まあ、いつもの事だが・・・。

「良いのかよ、こんな所で油売ってて」

グラディウスが俺にそう言ってくるが、

「何を言う。お前とて喜んでいるではないか・・・」

口ではそう言うが顔は嬉しそうだ。

どうせシャシュカの戦闘を見れる事に、喜んでいるだけだろうが・・・。

「では、参ります!」

ティルヴィングは刀を鞘から抜き放つと同時に、シャシュカに斬りつけた。

シャシュカはヒラリと避け、刀は宙を斬る。

——ヒュッ

シャシュカの着物の右裾から苦無が飛び出し、ティルヴィングに放

たれた。

——ガキイツ

器用にもそれを左手で持っていた鞘で弾き、右手の刀で再度斬りつける。

「やるねえ嬢ちゃん」

「どうも！」

シャシユカは草履のかかから刃を突き出させ、足を捻ってティルヴィングに放った。

これも鞘で弾く。

「暗器ですか!？」

それを見て、ティルヴィングが意外とでも言いたげに驚き、シャシユカと一旦距離を取る。

「苦無に暗器……。シャシユカさん、忍者と違いますか？」

「さあ、どないやるなあ」

シャシユカは笑みを浮かべ、曖昧な返答を返した。

ニンジャとか言ったが、知らんな……。

種族のような者か……?

<Side テイルヴィング>

すごい・・・！

苦無や暗器まで使うなんて。

私感動！

って、感動してる場合じゃないね。

この人、何かよく分からないけど・・・師匠と重なるのは気の所為？

師匠も黒髪で刀は勿論使うけど・・・糸目じゃないし、関西弁じゃないし・・・。

でも、シャシユカさんの避け方とか・・・よく似てるんだけど。

というより、その前に！

刀を使ってこないというのが悔しいところ。

まだまだ半人前って事かなあ・・・。

私は心の中で考えながら、再びシャシユカさんに斬りつける。

これもヒラリとかわされ、苦無が飛んで来るのを鞘で弾いた。

何か・・・ワンパターン。

いやいや、これも何かの罠かも・・・！

ああ、でも・・・師匠もワンパターンの後にいきなり攻撃を――。

――ヒュンッ

「うわっ！」

いきなり苦無で斬りつけられ、思わずのけ反ったが両手を地面についでバク転する。

「あ、危な・・・！」

「おお、よおかわしたなあ」

やっぱり師匠と重なる。

・・・こうなったら！

「失礼します！」

私は一気に急接近し、シャシユカさんの左足付近目がけて刀を振るった。

シャシユカさんはヒョイツと飛んで避けてみせるが、着物の裾部分が斬れる。

裾がヒラリと地面に落ち、シャシユカさんの左足に古い切り傷があ

るのを確認した。

「ああああっ!!！」

私は驚いて思わず立ち止り、刀をシャシユカさんに向ける。

「ん？何や？」

キョトンとしているシャシユカさんだが、私は驚きでいっぱいだった。

「ちょ、ちよつと右肩見せてくれませんか!？」

「右肩・・・？ええよ」

シャシユカさんは着物の下の右肩を見せ、そこにも傷があるのを確認する。

「やっぱりいいっ!」

私はすでに確信していた・・・。

<Side グラムドリンク>

「やっぱりいいっ!」

テイルが驚いたように声を上げ、シャシユカを呆然と見ている。

「もしかしてもしかすると・・・師匠!？」

・・・ティル、今何とおっしゃいました？

「「はあっ!？」」

「あらら・・・」

「おやおや」

フロツティとグラディウスが同時に声を張り上げ、リアとスティレットが軽く驚いている。

「何だと・・・？」

ゲイボルグは意味不明とでも言いたげに、片眉を上げた。

「あちゃあ、ばれてしもた・・・。どないしょ？」

「知るか・・・」

シヤシユカの問いに、ゲイボルグは呆れ果てて答える気にもならないようだ。

「ええ!?!何で何で!師匠関西弁じゃなかったじゃないですかっ!」

「何言つてんねや、言葉なんて気いつけたら如何とでもなるさかい、問題あらへん」

「で、でもでも!普段糸目じゃないし・・・!」

「それも自由に出来る事やんけ・・・」

ティルの質問にシャシユカ・・・いや師匠？は呆れていく。

「と、とにかく・・・！」

ティルは刀を鞘に納め、ズンズンッとシャシユカに歩みより、腕をガシツと掴んだ。

「な、何や？悪いけど帰らせて——」

シャシユカはティルの腕を振り払おうとするが、かなり強く、しかも言葉を遮られた。

予想外の言葉によって・・・。

「ダメ！日本の事、詳しく教えてくれるまで絶っつつ対に放しませんっ！」

ティルの言葉に、周りの空気が固まった。

「は・・・？」

それは誰の声だったのか・・・。

8話・予想外は日常茶飯事（後書き）

待っていたのは長き説教。

それを受けるのは、果てしてどちらか・・・。

9 話・相手の裏を突け（前書き）

お久しぶりでございます。

では9話、参りましょう。

9 話：相手の裏を突け

<Side グラムドリンク>

何で・・・こうなったの？

僕は目の前の状況に後悔の念を抱き、原因を深く考え直したが見つからない。

「せやから、何で日本の事話さなあかんのや？」

「そりゃ勿論！私が知りたいからに決まってるじゃないですかっ！」

ティルはチョココンと正座して地面に座り、その正面にシャシユカが胡座あぐらをかいて腰を下ろしている。

説教のような光景だが、受けているのはシャシユカのようにも見え
た。

しかもティルの後ろにリアが立ち、日本の話を一緒に聞いている。

それはステイレットも同じくで、興味深いですね・・・などと頷い
ていた。

「何この光景・・・」

フロツティも意味が分からんでも言いたげに、大きなため息を吐
いている。

「同感……」

僕もシャシユカの言葉に耳を傾けながら、フロツティに同意した。すると、フロツティの所にグラディウスが歩み寄って来る。

「何だ？」

フロツティの言葉を見せず、グラディウスはガシツと右腕を掴んだ。

「な、何だよ!？」

グラディウスは喚くフロツティを余所に、袖をまくる。

「……お前、この前の傷如何した？」

平然と行動するフロツティを不信に思ったのだろう。

前の戦闘でフロツティは右腕に傷を負ったはずだが、それが無いのを見てグラディウスは怪訝な顔をした。

「ああ、それは……」

言いかけたフロツティだが、ニヤリと笑みを浮かべる。

「教えねえよ」

「このガキ……!」

「ガキとは何だガキとは!俺は12歳だぞっ!」

「十分ガキだ！俺はお前より10も上だぞ！？」

「だから何だよっ！」

いきなり喧嘩を始める2人から、僕は距離を取る。

スタスタとゲイボルグの所まで歩み、

「連れて帰って」

一言文句を言う。

「遠慮しよう・・・」

怒っているグラディウスを静めるのが面倒と考えたのか、ゲイボルグは話し中のシャシユカ達を見ながら小さく返した。

その言葉にガクンと肩を落とし、今度は別の質問を投げかける。

「この前、兄弟の質問した訳は・・・？」

「答えられんな」

こちらの質問に即応じ、ゲイボルグは僕と視線を合わせようとしな
い。

僕は問いの答えを諦め、ため息を吐きながらしゃがみ込んだ。

勿論、ゲイボルグの隣で・・・だが。

「何故座る・・・？俺はお前の敵だろうが」

「いや、でもねえ・・・」

僕は喧嘩中の2人と、話し中の4人を見比べ困った顔をする。

如何しろと・・・？

——ガキインツ！

「・・・？」

いきなり金属音が響いた為、そちらへ視線を向ける僕とゲイボルグ。

そこでは喧嘩していた2人が更にエスカレートし、剣を振り回していた。

「『喧嘩』の枠に収まってないね・・・」

「『勝負』に入っているな・・・」

僕達はその光景に半ば呆れ、ボソリと呟く。

「早く連れて帰れ・・・」

ゲイボルグがリアやフロツティ、ティルに視線を移してそう言った。

「リアは帰ると思うけど・・・ティルは無理。フロツティは・・・引っ張って帰る」

僕は立ち上がって話し中のグループに向かう。

「まだあ？」

覗き込むように尋ねると、テイルが思い切り横に首を振った。

「全然っ！後1日欲しいくらい！」

「1日い！？流石に付き合つてられへんわ・・・」

テイルの一言を聞いてシャシユカが呆れ、姿を消す。

直後ゲイボルグの隣に現れ、ほな帰るかと呟き巨鳥に飛び乗った。

は、速っ・・・！

「ああ！」

テイルが驚く中、ステイレットがグラディウスの腕を掴み、ゲイボルグと共に飛び乗る。

「ステイレット、放せ！俺あまだあのガキと決着付けてねえんだよっ！」

「何言ってるんですかあなたは・・・」

グラディウスの子供のような言い分に、ステイレットは苦笑いを浮かべた。

「師匠！まだ話は終わってませんよっ！」

「終了や終了〜。強制終了はい、さいなら」

怒るテイルに意地の悪い笑みを浮かべながら、シャシユカが軽く手を振る。

巨鳥は舞い上がり、4人は遙か彼方へ姿を消した。

「リンクッ！」

「は、はい！」

テイルにいきなり大声で呼ばれた為、思わず背筋を伸ばしてしまふ。

「早く帰るよ！帰って師匠を問い詰める！」

「う、うん」

テイルとその師匠の家は近所なので、すぐ尋ねる事は可能だと思っが、果たして会う事が出来るのかと不安になった。

フロツティは不満足な顔ををしていたが、剣を消して腕を組む。

「あいつ、文句だけ言って帰りやがった・・・」

などと小さく愚痴を呟いていたが、僕が呼ぶとそれも止めて集合した。

「あ、そうだテイル」

ふと思いついて、今だグチグチ呟いていたティルに声をかける。

「え、あ、何？」

自分の世界から戻って来たティルが、僕に不思議そうな顔で聞き返してきた。

「あのさ、このラケン・・・ウダーホルトだけ？半分残しとくから、成分を調べてくれないかな？」

「調べるの？任せて！」

ティルは学者希望なだけあって、こういう事も得意だ。

僕達の中で一番賢いのかもしれない。

外見が合っていないけどね・・・。

僕は紅い粉を振りまき、アロндаイトに帰還した・・・。

<Side ティルヴィング>

リア姉の家にいた為、そこで解散となる。

—— スタスタッ

私はアロндаイトに帰るなり、リンクから受け取った小瓶をポケッ

トに突っ込み、師匠の道場へ向かった。

「師匠っ！」

——ダンッ！

思い切り道場の扉を押し開け、道場の中へ入る。

人これを‘不法侵入’と言う……。

道場の中は明かりが付けられておらず、整然としていた。

強引にスイッチを付け、次々と明かりが灯る。

「……逃げたな！」

私は道場の壁を思い切り殴り、誰もいない道場の電気を消して家に帰った。

「ただいまっ！」

少し怒り気味にそう叫ぶと、母さんが如何したの？と不思議そうに聞いてくる。

「あ、そういえばティル。師匠から伝言預かってるわよ？」

「え！？」

私は母さんの言葉に食いついた。

「何でも急に引越しが決まったらしくって、これから剣術を教えられなくなるって……」

母さんは悲しそうな顔をするが、私は師匠めええ……！と拳を握る。ダダダッと2階へ上がり、部屋にこもった。

師匠の事を考えていても仕方ない為、瓶の成分を調べ始める

「ん……全く分かんない」

少しして気晴らしの為、大きな欠伸をしながら背伸びした。

ふと師匠の事を思い出し……。

「もうっ、師匠なんか知らないんだから！」

私は壁にかけてあった刀を鞘から引き抜き、部屋の中で一閃する。これで満足する訳が無く私は家の外に出て、わらで作った人形を一刀両断した。

「テイル、夕飯いらないの？」

母さんが窓を開けて聞いてくるので、いりますいります！と慌てて答える。

刀をカチツと鞘に納め、すぐに家の中へ戻った。

空腹だったので一気に食べ終える。

「「ちこそさま！」

「早……」

母さんは食器を洗いながら、2階へ駆け上がる私を見て啞然としていた。

部屋に戻り、刀を元の場所に戻す。

「はああ……」

誰が聞いても分かるような深いため息を吐き、刀を見つめた。

この刀は師匠から貰った物……。

刀を鞘から引き抜き、窓から差し込む月光を反射させる。

「あれ……？」

刀身の根元、？の部分はなに文字が刻んであった。

今まで何回も使ってきたのに……気付かなかったなんて。

む……文字が読めない……。

日本の古い文字かなあ。

でも本で見た事無いけど……。

「ま、いつか。今度師匠にあつたら問い詰めてやるっ」

フフフと不気味な笑みを浮かべながら刀を戻し、粉の成分をまた調べ始める。

紅い粉、かぁ……。

紅……赤……朱？

いや、連発しても出て来ないけどね……？

「でもどっかで見た事があるんだよねえ……」

本で読んだような気もするが、読んでないような気もする。

もしかしたら誰かに聞いただけかもしれない。

『テイル、もし——たら、誰にも——』

あれ、何だろ。

今師匠の言葉で何か思い出したような気がしたけど、何だっけ？

確かぁ……。

『テイル、もし紅い粉見たら、誰にも言わんときいや』

「………。やっぱり問い詰めておくんだっただあっ！」

私は頭を抱えて後悔しながら、叫び散らす。

師匠は今何処にいるか分からないし……聞きよつが……。

つて、あれ？

あのに何か言っただけ？

「そつだ、私が紅い粉の事を聞き返して……。で、確か……」

『ん、せやなあ……。そこに本があるんやけど……。読む？』

師匠は道場の隣にある倉庫を指差して……。つて倉庫！

もしかしたら、何か手掛かりがあるかもしれない……！

私は一気に階段を駆け下り、家を飛び出した。

背後から驚いた母さんの声が聞こえたが、無視して道場の倉庫へ走る。

「え……？」

私は夜の青黒い夜空に、ぼんやりと紅い光が地上で灯っているのを目視した。

火事……！

「しかもあそこつて……！」

火が上がっている場所は、私が目指している場所に近い。

ってか・・・その場所だし！

私は止めていた足を再び動かして、道場目指して走り出す。

——キキキツ！

「はあ、はあ、はあ・・・！」

道場の前に立つが、私は呆然と燃え上がるそれを見上げていた。

耳を澄ませばサイレンのような音も聞こえてきたが、私は炎に吞まれていく倉庫を見つけ、肩を落とす。

「先越されちゃった・・・」

恐らくブイオ・アストーレとか言う組織が、先手を打ったのだろう。

倉庫内の資料を完全に燃やされた。

何本か刀もあったが、大事な物は自分の家にあるから大丈夫と考え、諦めて家に帰る。

「・・・そうだ」

私は家の前に立ち、頭を回転させた。

視線を隣の家に移す。

あの人なら、何とか調べてくれるかもしれない・・・。

私は希望を抱き、隣の家に向かった。

——ピンポーンッ

「すいませ〜ん！」

インターホンを鳴らし、中にいるであろう事を願う。

・・・返事が無い。

「いないのかぁ・・・」

ほぼ諦めかけた状態で扉の握りを回して押すと、ギイツと鈍い音を立てて開いた。

まるで古びた扉のようだが、長年訪問者がいなかった訳ではない。

つていうか私、先週来たもん。

「おじさ〜ん、何処ですか〜？」

廊下までちらかっているが、いつもの事なので気にしない。

家の中に私の声が響いていくが、これまた返事が無いので寝ている可能性が高くなってきた。

「じゃあ、あの部屋かな・・・？」

周りの扉を無視し、更に奥へ向かう。

廊下の突き当たりにあつた扉を開けて中に入ったが、思わず顔をしかめてしまった。

「相変わらず臭いい・・・」

薬品の匂いに思わず鼻を押さえながら部屋に入り、ちらかっている本を避けて窓際の机へ向かう。

机に1人の男性が突つ伏して眠っていた。

「Zzzz・・・Zzzz・・・」

研究者のような白衣を纏い、眼鏡が机の上に置かれている。

男性の黒髪は乱れ、部屋も散々なちらかり様だ。

ま、いつもの事だしね。

「起きて〜」

「ん・・・？」

私が軽く揺ると、20代前後の男性が顔を上げた。

この人は研究者でもあり、その若さで教授でもあるエリクシア先生。

通称リクア先生・・・男性だよ？

名前に女性だと勘違いしそうだけど、男性でございます・・・。

「おや、ティル君じゃないか……。何か用でもあるのかい？」

眼をこすり、眼鏡をかけて不思議そうにこちらを見て来るリクア先生。

「実は……」

私はポケットから瓶を取り出し、成分を調べて欲しいと頼んでみる。

「この成分を……？構わないよ。最近暇だったからねえ」

いや、それ最近じゃなくていつもの間違いじゃない……？

「そうだね……。明日の朝にでも来てくれるかな？その頃には終わってるだろうから」

「はい」

お願いしまゝす、と任せした後、私は家に帰宅した。

明日、かぁ……。

<Side シャシユカ>

「　　」

ワイが上機嫌で口笛吹いていると、隣にいたグラディウスが怪訝な

顔をしてこちらを見た。

「何か良い事でもあったのかよ・・・？」

「ん〜？せやねえ・・・特に何もあらへんよ」

「嘘つけ」

お、鋭いなあ。

まあ、テイルにばれんよう倉庫燃やしてっただけなんやけどな・・・。

今頃、舌巻いとるんとちやうか・・・？

粉の事、ばれんかったらええんやけどなあ。

。ワイは小さな心配を抱きながら、換気窓から月を見上げていた・・・。

9 話・相手の裏を突け（後書き）

黒雲が払われ、光の下にさらされる闇。

真実は、時に残酷な物となる・・・。

10話・知った事と目指す事（前書き）

10話、参りましょう！ 若干気分が良い

10話：知った事と目指す事

<Side テイルヴィング>

朝8時。

私は手っ取り早く朝御飯を済ませ、リクア先生の家へ向かう。

あの人、一応教授だけど日頃は家にいるんだ。

何でも今は大学の方が休学中だとか……。

リクア先生の家の前に立ち、インターホンに手を伸ばす。

——ピンポーンッ

……返事が無い。

ははあくん……。

さては、研究に夢中で夜通しやってました的なパターンだね。

そんでもって今頃爆睡……。

うん、毎度毎度の事でよろしい。

……私は何様だ？

勝手に1人ブツブツ呟きながら、私は家に上がり部屋へ向かった。

一応扉をノックしたが、予想通り返事が無かった為爆睡中だと確信する。

扉を開けて中へ入ると、机に突っ伏した状態でいびきをかいているリクア先生を発見。

「起きて下さい」

「ん？・・・ああ、ティル君か・・・もう朝かい？」

ノソリと起き上がり、リクア先生はカーテンを開ける。

眩しい太陽光が部屋の中に差し込み、そこら辺に積もっているほこりがよく見えた。

リクア先生は椅子に座り、私に瓶を向ける。

受け取るうとしたが、ヒョイツと避けられた。

「意地悪しないでよ」

「意地悪じゃないよ。ティル君、これを何処で手に入れたんだい？」

いつに無く真剣な表情で、リクア先生が瓶を片手に問いかけて来る。

誤魔化す、かな・・・。

「友達から預かってるの」

別に嘘はついてないよ。

ただ細かい部分を省いただけだもん、うん。

「ふん……」

リクア先生は疑いの眼差しを向けながらも、仕方ないなと私に瓶を返してくれた。

「とりあえず研究報告と行こうか。それが如何いう物かは知らないけど、材料は何となくだが分かったよ」

リクア先生はクルリと椅子を回転させ、机に向き直り厚いノートを開く。

私が興味津々で材料を尋ねると、予想もしない言葉が返ってきた。

「グラスタの血だ」

「……え？」

リクア先生の言葉に、私は思考が止まりかける。

「グラスタの……血？ど、如何いう事なの？」

意味が分からず、聞き間違いだろうと思いつつながら問い返した。

「これ以上の意味も、これ以下の意味も無いよ。材料はグラスタの血。それだけだ」

リクア先生は淡々と呟き、本を読み始める。

私は俯き少し考えた。

材料はグラスタの血……。

バイオ・アストーレとか言う組織は、一体何をしているの……？

急に寒気が走り、思わず身震いした。

「ありがとね、リクア先生。ゆっくり休んで〜」

バイバイと手を振り、私は扉を閉める。

突如、扉の向こうからいびきが聞こえ、驚いた事は余談であった。

私はその後すぐにリア姉の家へ向かい、リンクとフロツティも集合する。

先日のように、リア姉の部屋に集まった。

「それで、収穫は？」

単刀直入にリア姉が問いかけて来る。

私はポケットから瓶を取り出し、リンクにラケン・ウダーホルトを返した。

「1つだけ収穫あるよ。かなりでかいけど・・・」

「何だよ、早く言えって」

焦らされたフロツティが、思わず私を急かす。

「ラケン・ウダーホルトの材料は・・・グラスタの、血・・・なんだ」

私が小さな声で呟くと、しばしの沈黙が部屋を包んだ。

「ええええええつつ!?!?」

「グラスタの、血・・・!?!?」

リンクとフロツティが一齐に驚き、リア姉も眼を見開いている。

「え、何!? ブイオ・アストーレってかなりやばい組織なの!?!?」

フロツティが今更頭を抱えて喚き散らしていた。

——コンコンッ

部屋の扉がノックされ、ビクツとする一同。

「リア? 何かあったの? 凄い叫び声が聞こえたんだけど・・・」

リア姉の母さんの声。

「大丈夫よ。ゲームの話だから」

さ、流石リア姉。

冷静に対応して、上手くあしらってくれた。

はあ〜と息を吐いて安堵する私とリンク、フロツティ。

「如何する？ 奴等、何仕出かすか分からないよ？ こんな物まで作ってるんだから……」

リンクは半分残った紅い粉を見ながら、腕を組んだ。

「私は止めるべきだと思うわね」

リア姉が懐から携帯小説らしき物を取り出し、口を開く。

「どして？」

フロツティが怪訝な顔をし、瓶を眺めながら聞き返した。

「グラスタの血が材料と言う事は、グラスタに血を流させているという事。つまり、グラスタを傷つけている訳よ」

「なるほどな。それは俺も許せねえ」

「にしても、何でグラスタの血が材料なんだろ？」

リンクが首を傾げてラケン・ウダーホルトを見つめる。

「あ、それならたぶんだけど・・・」

私はグラストタについての書物を読んだ時の事を思い出し、内容を脳裏に浮かばせた。

次々と文が蘇る。

「『グラストタは神聖なる生き物なり。それらの血は力を秘め、それらの体は災厄を巻き起こす。人とは外れた存在であり、強き者は弱き者を墮とし、その上に立つであろう。強き者が勝つという定石は存在せず、勝った者が強いのである。人これを弱肉強食の世界と言』・・・」

「相つ変わらずの記憶力・・・」

言い終えた私に、思わず苦笑しているリンク。

「『それらの血は力を秘め——』ねえ・・・」

リア姉は納得したように頷き、本を読み始めた。

まさかその血が世界を裏表に渡れるとは、誰も思わなかったはず。

だが組織はそれを突きとめ、ラケン・ウダーホルトという魔粉を作り上げた。

「強大な組織・・・」

「え・・・？」

私の小さな眩きを、リンクが何？と聞き返す。

何でも無いと首を振った。

<Side リンク>

「止める事は決定だけど・・・今の僕達じゃ勝てないよ?」

そう。

ゲイボルグ達の腕は確かだ。

ついこの前まで武器を使った事も無い僕達じゃ、勝てっこない。

あ、テイルならシャシユカに勝てるかも・・・。

・・・無理だね。

師匠って言うてたし。

「私は短剣と弓で良いわよ」

リアが本を読みながら、自分の武器を決定する。

「俺は剣だっ」

「私、刀!」

「僕は槍だね」

フロツティとティル、僕も決まった。

けどまあ、如何してこつも相手と被るんだろ……。

僕もゲイボルグと同じ槍だし、フロツティも同じくグラディウスと同じ。

リアは弓でも闘えるだろうから良いけど。

ま、ティルが師匠と同じなのは当然って言えば当然だね。

同じ刀なのはしょうがない。

「奴等が何してるのかは知らねえが、今飛び込んでも勝てねえな。よおし、しばらくの間修行して、あいつ等を驚かしてやるうぜっ」

フロツティは何故かやる気満々だ。

「そうだね。私もそれで良いと思うよ」

ティルもうんと頷き、立ち上がる。

いつまで修行するかと僕が問いかけたら、リアがパタンツと本を閉じた。

「3ヶ月後、学校が長期休暇になるわ。その時まで各自修行よ。休暇に入ったら、アンダーヴェルトに乗り込む。これで如何？」

リアの提案に、僕達3人はコクリと頷く。

「そうそう、昨日ティルの師匠の道場が燃えちゃったんだよね？」

「そうだけど・・・？」

「あそこが残っていたら、修行場所に持って乞いだったのになあ・・・」

僕が惜しいように呟くと、ティルが小さく笑った。

「大丈夫。本格的に燃えたのは倉庫だけみたいだから。道場はほんの少ししか燃えてないよ」

「そうなの？」

「うん。師匠に家族がいなかったから、弟子の私に道場が受け継がれるみたいで、一応使えるんだ」

希望が見えてきた。

ティルが言うには、道場は燃えた壁を一部取り換えるだけなので、1週間後には使えるようになるらしい。

それまでは各自家の庭で練習するとして、それからは道場を使えば良いだろう。

「それに、確か今週から武器の授業よ」

リアが更に嬉しい情報を口にした。

「よし、さっさと力をつけるぞっ！」

「お〜！」

「騒がしくなるわね・・・」

フロツティの掛け声に僕とテイルが拳を突き上げ、リアは小さく笑った。

「では！武器の授業を始める！」

月曜日。

学校の1限目、武器の授業が始まった。

校庭に僕達3期間目の生徒が60人程度、全員集合し、複数の先生が周囲にポツポツと立っている。

ガトー先生にラハイグ先生、ルーフェ先生、ブリューナク先生・・・。

あ、ブナン先生とも言うね。

普段クラスが違うテイルも、今回は合同なので一緒に行動する事が出来る。

テイルが軽く手を振って来たので、それに振り返した。

「全員、自分の好きな武器を想像して、ゴッターで作り上げなさい！」

人数が多い為、ガトー先生が声を張り上げて指示する。

僕達は一度作っているし、どんな武器かも決まっていたから作るのは早かった。

「先生、終わりました！」

「俺も！」

「私もです！」

「右に同じく」

僕は槍を手に、フロツティは剣、ティルは刀、リアは腰に短剣の鞘をさして右手に弓を持っていた。

「お、ずいぶん早いな。武器を作る事が難関だと思っていたんだが・・・」

ガトー先生も眼を丸くして驚いている。

「ティルヴィング君、それは何ですか・・・？」

普段無口なラハイグ先生だが、ティルの持っている刀に興味を示した。

周りの皆も、見た事が無い剣に驚いている。

「これは刀つて言う剣で、東の国で使われてた剣です」

ティルが鞘から抜き、刀を握った。

「曲がっているとは・・・珍しいですね」

ラハイグ先生はそれを見ると、満足したのか本を読み始める。

「早く武器を作りましょうねえ」

相変わらずのんびりとしているルーフェ先生が、まだ作っていない生徒達に声をかけた。

生徒達は懸命に想像し、ゴッターを形にしていく。

短剣やら剣やら槍やら・・・とにかく幾つもの武器が作られていった。

「・・・こうやって見ると、武器屋並みね」

リアが思わず呟くと、僕はそれを聞いて苦笑する。

「よし、全員作れたな。補助教員の先生にも来てもらったから、4人に1人先生が付く！それぞれ好きなグループに分かれるように！」

60人程度で4人に1人の先生つて事は・・・先生は15人くらいいるのかな？

結構いたんだね、初めて知ったよ……。

で、勿論僕達は4人のグループを作った。

メンバーは言わずもがな。

「先生つて誰だろ」

フロツティが周囲を見回し、僕達を担当する先生を探していた。

「フッフッフ、勿論私だぞお！」

ガトー先生が、背後からフロツティの頭をガシツと掴む。

「げ……」

フロツティは最悪だと小さく呟いたが、それを敏感に聞き取った先生がグリグリとねじった。

「何でもありませんっ！何も言ってますんっ！」

懸命に言い訳するフロツティ。

その様子には僕は苦笑し、ティルは爆笑していた。

リアはいつもの事だと考え、懐から本を取り出し読み始める。

「さあて、一緒に勉強しようじゃないか！フロツティ君？」

「は、はいっ！」

「あははははっ！もうダメっ、腹が・・・！」

先生に肩を抱かれるフロツティの後ろでは、ティルが腹を押さえて座り込んでいた。

僕はティルといういつものプラスに、苦笑している。

本当・・・何でこうなんだろ・・・。

10話：知った事と目指す事（後書き）

日頃の日常が、何事も無く経過する。

少年達は止まる事を知らない・・・。

11話・慣れる体、追う視線（前書き）

遅くなって申し訳ありません。

忙しい上にこちらは1話が長い為、書くのに時間がかかってしまいました。

デジモンシリーズの方も書かないといけませんね……。 （苦笑）

12話は土日明けになるかと思えます。

今週中には無理です。 シュン……

とりあえず気を取り直して11話、参りましょう。

11話：慣れる体、追う視線

<Side グラムドリンク>

「はっ、せいっ！」

僕は槍を突き出し、ティルの刀をすり抜けようと攻撃する。

ティルは刀の側面でそれらを受け流して避ける為、なかなか攻撃が当たらない。

フロツティとリアはガトー先生とやり合っており、その間に僕とティルで一試合という訳だ。

たぶん、他の皆よりも僕達4人の方が成長速度は速いと思う。

何せ目標があるからね。

僕は、ゲイボルグだ。

勝たないと、いけないんだ・・・！

「こらリンク、何か考えてるでしょ！」

考え込んでいた僕を見透かして、刀の剣先をビシッと僕に突きつけるティル。

「え、あ、ごめん」

思わず頭をかきながら、苦笑いを浮かべて返した。

もうっ、と頬を膨らませるティルだが、本人も気づかないところでフロツティをよく確認している。

フロツティとティルって、喧嘩は良くするけど仲は良いんだよね。

「ほらほら、行くよ・・・！」

横目でフロツティを見つめているティルに、僕は素早く槍の穂先を突き出した。

——ガギギッ！

ティルはすぐに反応して、刀の側面で穂先を受け流し僕の攻撃をか
わす。

刀をそのまま突き出し、鋭い突きを繰り出した。

僕は足を踏み切り、槍の柄で刀身を弾いて更に強く踏み込む。

「はあああっ！」

柄を左手に持ちかえ、思い切り槍を振るった。

——タンッ

え・・・？

ティルは軽い体を活かし、地面を蹴って跳び上がる。

逆さに落ちて来るが、刀を地面に突き刺してクルリと見事に体勢を整えた。

す、すじ……。

「器用だね」

「まあね」

テイルは地面に着地すると刀の先を引き抜き、鞘に納めて脇に構える。

「嶺？流……」

テイルが左足を退いて体勢を低くした為、僕は槍を盾にして警戒し両腕に力を込めた。

その緊張した空気に気づいたのか、周りの皆も注目している。

「抜剣っ！」

——ドンッ

テイルが急接近して僕の懐に突っ込んで来たのを、視界の端で目視した。

防御……！

——ガキインッ！

「うわっ!?!」

刀が物凄い速さで鞘から引き抜かれ、勢い良く僕の槍を切断する。

その衝撃で僕は腰をついた。

「ふ〜・・・」

ティルは刀を一振りしてから流れるような動きで鞘に納刀し、手を合わせて一礼する。

周囲から歓声が上がった。

は、速い・・・!

僕は立ち上がりながらティルの速さを認識し、斬り裂かれた槍をまじまじと見つめる。

すごい。

あの一瞬で槍が半分に斬られた。

ゲイボルグに勝つには、まずあの速さに慣れなければならない。

僕は両手で槍を強く握りしめ、切断された部分をゴッターで修復する。

「ティル、もう一回!」

「ええ!？」

予想外だったのかティルは驚いた表情をするものの、渋々を僕に付き合ってくれた。

「行くよ・・・！」

ティルは後方へ跳び、距離を置いて鞘に納めた刀を構える。

ティルの足に力がこもるのを感じ、両足と槍を持つ手に思わず力が入った。

——ドッ!

先程よりも速い速度でティルが急接近してきたが、今度はハッキリと見える。

抜かれる刀。

迫る刃。

振るわれる刀剣。

——ガギイツ!

「嘘!？」

僕は槍の穂先で刀を受け止めていた。

流石のこれにはティルも驚いていたようだが、僕自身も夢のようだ。

あの瞬間、時間が遅く感じてギリリと光る刃が迫っていると確信した時には、両手に指令を送っていたのだから。

防げ、と。

何だろう・・・。

今、確かに防いだという感覚があったが、偶然じゃない気がする。

見えたんだ、ティルの速さが・・・。

「リンク、今度は違うの行くよ」

ティルが刀を抜いたまま右手に握り、鞘を左手に持って僕に笑みを向けた。

僕は気を引き締め直し、ティルの攻撃に構えの体勢を取る。

「嶺？流・・・」

ティルは腰を落とし、刀と鞘を持つ両手を後ろへ伸ばす。

俗に言う、クラウチングスタートに少しだけ似てるかな・・・？

—— シュンッ

突如ティルの姿が消え、僕の周囲に幾つもの残像が残り惑わす。

「どれ・・・!?!?」

周りの皆も思わず距離を取り、本物のテイルを探し出そうとしていた。

先生達は驚いているものの、テイルの動きをきちんと見極めている。

僕は先生達の視線の先を辿り、そこへ槍を突き刺したが幻のようにそれは消えて手応えが全く無かった。

「幻・・・！」

見れば先生達も顔を見合わせ、本物がどれか判断が付いていないようである。

——バシユンッ！

「え・・・！？」

いきなり僕の槍が切断され、テイルが元の位置に立っていた。

刀は流れるような動きで、再び納刀される。

「陰陽矛盾いんようむげん・・・」

テイルは小さく剣技名を呟き、カチンッと刀を鞘に納めた。

速すぎて残像が残っていたんだ・・・！

やっぱりテイルはすごいな。

でも、それだから勝ちたいって思っただよ。

「もう一回、してくれる？」

僕はゴッターで槍を修復し、やる気満々でテイルに問いかけたが如何やら愚問だったらしく、笑顔で頷かれた。

——ザッ

テイルが再び、あの独特の構えに移る。

「陰陽矛盾・・・！」

——シュンッ

また消え、僕は周囲の幻を無視して視線を走らす。

何処だ・・・？

ダメだダメだ。

眼で追っても見つけられる訳が無い。

僕は眼を閉じ、視界に頼らず第六感を信じる。

——ヒユウ・・・

風の流れを感じバツと振り返って槍を盾にした直後、鋭い衝撃が腕を走った。

——ガキイツ

「お見事！」

防いだ僕に、テイルが予想していたかのように賞賛の言葉を発して、大きく後方へ跳び退って距離を取る。

再び周囲から歓声上がるが、僕は防げた事に喜びを感じていた為、その声も聞こえなかった。

<Side テイルヴィング>

やるねえ、リンク。

一度見ただけでクリアするなんて。

リンクに勝つ為には1回目が重要のようで、2回目からは効果が無いと思っても過言ではないだろう。

リンクは昔から観察力が鋭く、私達も何度見逃していた事に気づかされたか……。

私達4人の中で、間違い無くリンクが一番視力が高い。

反射神経等も優れている為、対処法もすぐに閃く事だろう。

「負けてられないなあ……」

「え、何？」

距離が空いていたし、私も小さな声で呟いた所為かリンクが聞き返してくる。

「何でも無いよ」

私が笑顔で返すと、そう？とリンクも槍をゴッターで修復していた。

私は鞘を消し、ゴッターでもう1本刀を作る。

「嶺？流、二蓮にれんけつ?!」

私は両手に刀を持ち、リンクに接近した。

「二刀流・・・！」

リンクは槍を手に、私の右手の一撃を受け止めるが左手がまだ空いている事を忘れてもらっては困る。

「はぁあっ!!」

左手の刀を振り払ってリンクの槍を弾き、右手の刀で斬りつけた。

完全に無防備なリンクに一撃すると思っていたのに、金属音が耳に入り驚愕する。

「残念」

リンクは瞬間的に2本目の槍を作り上げ、見事に防いでいた。

私もまだ二刀流に慣れておらず動きが遅い為でもあったが、リンクは素早くそれを防いでいる。

その後は攻防の応酬となった……。

1週間後、道場の整備が終わり使用可能になる。

私達は学校終了後、早速道場にて集合した。

「うわ、広い」

リンクが道場の中央に立ち、天上や壁までの距離を確認する。

剣技の道場だと言うのに何故か弓道用の的等も置かれていた為、リア姉も修行出来た。

「良い道場ね」

リア姉が的の質を見ながら、私に笑みを向けて来る。

気に入ってくれたのかな……？

「これなら思い切り出来るってもんだぜ」

フロツティに至っては、早速剣を作って素振りしている。

それに習ってリンクも素振りを始めた。

「リア姉は勿論そこね。フロツティとリンクがそつちで、私がここ。これで良いかな？」

道場内は広いから十分な場所を確保出来る為、それぞれの修行場所を決める。

3人は異論が無いようでコクリと頷いた。

道場の左側に的と藁人形がある為、リア姉と私は左側。

フロツティとリンクはお互いに一試合していた。

私は刀を作り上げ、藁人形を相手に修行する。

—— ヒュカツ、ヒュヒュン、ザッ

矢が的に刺さる音と、刃が空を斬る音、足を踏み切る音が道場内に響き渡り誰も声一つ漏らさない。

皆自らの敵を思い浮かべ、集中し切っているのだろう。

静かで激しいような時間が刻々と過ぎていき、気づけば壁の時計の針は午後6時過ぎを示していた。

「もうこんな時間……。今日はここまでにしなない？」

私は振り返って3人に問いかけると、3人共かなり集中していたらしく時計を見て驚いたような表情を浮かべた。

「え、もう6時？」

「早くねえか？」

リンクとフロツティが顔を見合わせて眼を瞬かせる。

それほど夢中になっていたのだろう。

私達は道場を簡単に掃除し、電気を消して鍵をかけ各自家へと帰っていった。

「ただいまあ」

「お帰り。今日は遅かったのね」

家に帰ると玄関内でも夕飯の匂いが漂って来た為、思わず空腹を覚える私に母さんが声をかけて来る。

「うん。これからこの時間帯になると思っよ」

私がそう返すと、母さんはそうなの？と不思議そうに首を傾げた。

師匠がもう引越した事を知った母さんは、何故こんな時間帯になるのか不思議に思っているのだろうが、私は誤魔化して答えなかった。

「いったただきまゝす」

かなりの空腹だった為、夕飯にかぶりつく私。

母さんが喉を詰まらせるんじゃないかと心配して、コトンと水をテーブルの上に出してくれた。

「ふぁひはふぁ（ありがとう）」

「飲み込んでから話さないよ」

私が食べ物に口を含んだまま言葉を発すると、母さんが呆れたような顔をする。

テレビのニュースを見ながら、私達は夕飯を食べ終えた。

父さんは何年か前に他界したんだ。

2人だけの夕飯だったけど、結構楽しいんだなあこれが。

「あはは！」

私は母さんの近所話を聞き、思わず腹を押さえて笑う。

楽しい時間を終え、私は2階の部屋へ向かった。

「ふう……」

ベッドの上に思い切りダイブし、両腕を広げて一息つく。

ジューツと電灯を見つめていると眼が痛くなってきた為、慌てて閉じた。

—— チクツ……チクツ……

時計の針が時を刻む音だけ耳にしつこく入って来るのに気づき、ガバツと起き上がって何時か確認する。

「7時半、かあ・・・」

まだ時間あるね。

私はベッドから降りて壁にかけてあった刀を手に、家の外の庭へ向かった。

庭にも藁人形があるから、きちんと修行出来る。

「ふう・・・」

刀を順手で持つて構え、息を吐いて精神を集中した。

「ああああああっ！！」

声を張り上げて気合を込め、自らを鼓舞し刀を振り切る。

——ザシュンッ！

結構な手応えを両手に感じて後ろを振り返ると、ザックリと切断された藁人形が視界に入った。

その切り口を見て笑みを浮かべる。

「満足満足」

藁人形が縦に一刀両断されているのを確認し、私は刀を鞘に納めた。

庭の隅っこに置いてあった紐を手に、藁人形を修復する。

「　　」

私は鼻歌交じりで、これからの日々を想像していた。

家の窓から、優しい微笑みを浮かべた母さんが見ているとも知らな
いで・・・。

11話：慣れる体、追う視線（後書き）

少年達の成長に驚く教師達。

遂に長期休暇の時が来た・・・。

12話：実力には実力を（前書き）

遅くなりました。

大変申し訳ございません。

そして何故か今回は長いです。

では12話、参りますね。

12話：実力には実力を

<Side グラムドリンク>

道場で皆と一緒に修行して約3ヶ月が経過したんだけど、少し気づいた事が多数……。

まず僕だけ……。

——ザシユンッ！

「……いまいち」

藁人形を短剣で斬り裂き、不満げな表情を浮かべた。

後から気付いたんだけど、僕は特にこの武器が得意というものは無く、剣やら槍やら弓やら短剣やら……。

とりあえず一通りの武器は使いこなせるようになった。

のは良いけど、やっぱり得意な武器は欲しいもの。

今は一番使用歴が長い槍を使っているけど、やはり得意ではない。

「ま、いつか……」

ゴッターを使用して短剣から槍へと変化させ、もう一度藁人形と向き合っ。

「おおおおっ！！」

僕の背後から気合のこもった覇気が飛んできた。

振りかえって様子を確認すると、ティルが二刀流で藁人形を斬り刻んでいる。

これも気づいた事の1つ。

ティルって気合込める時、声の迫力って言うか覇気って言うかとにかくすごい。

これにはフロツティも悔し顔。

・・・何故に悔しがる？

——ヒュカッ！

ティルの少し離れた所では、リアが神経を集中させて矢を射ていた。的を見事に射抜き、壁に突き刺さっている。

あ、後これも気づいた事なんだけどね、武器にゴッターを纏わせたりますると攻防力が上がるんだ。

これは人体にも同じくで、足にゴッターを纏えば跳躍力が上がったりする。

「リンク、俺と一戦しようぜ」

リアの射撃に見とれていた僕にフロツティが声をかけてきた為、僕は慌ててフロツティに向き直った。

「あ、うん。お手柔らかに」

僕は槍を構え、重心を下に下ろして体勢を低くする。

「こっちのセリフだ」

フロツティも剣を右手に笑みを返した。

——グウウウ・・・!

お互いの槍と剣が、銀と紅のゴツターに包まれて強化される。

フロツティは剣を右手に持ったまま、構えを取らない。

何でもこの方が相手を見やすいんだとか・・・本当かなあ？

いや、試す気は無いけどね・・・？

——ヒュカツ!

リアの矢が的を射た瞬間、僕が動きフロツティに駆け出した。

3ヶ月で鍛え上げた腕力を使い、鋭く槍の穂先を突き出す。

——ガギギギイッ!

フロツティが剣の側面で穂先を受け流し、流すように剣を僕の方へ

振るった。

——ガッ!

僕は槍の柄を使ってそれを防ぎ床に伏せた直後、手首を捻って槍を回転させる。

「ぐ・・・!」

フロツティは剣先を床に向けて、薙ぎ払われた穂先を防いだ。

が、右手の順手だった時に剣先を床に向けた為か手首が苦しいらしく、顔を僅かに歪ませる。

僕はその隙に気づいてすぐに体を起こし槍を両手で持ち、柄の先端にある石突きでフロツティの額を突いた。

「がっ・・・!」

意識が一瞬飛んだであろうフロツティだが、直前にゴツターで額を守ったらしく意識を取り戻した瞬間に剣を振るって来る。

「わっ、と」

体を横へ反らしてそれを避け、今度は槍の穂先を向けた。

「はっ!」

勢い良く振り払い、フロツティの足を引っかける。

「お!？」

ガクンツと床に腰を突いたフロツティに、僕は槍の柄を叩きつけて叩き潰そうとした。

フロツティはすぐさま剣の腹でそれを防ぎ、力比べに突入する。

勿論上から押す力の方が強いと言えば強いが、そもそも僕とフロツティでは僕の方が劣っていた。

故にすごい力で槍を弾き返されてしまい、僕が体勢を整える間にフロツティが跳び上がるように立ち上がる。

「行くぞおっ！」

フロツティはそれほど素早いという訳ではないが、力がすごい。

剣を振りかぶって来たフロツティを確認し、僕は避ける方を選ぶ。

体を振り下ろされた剣の右へずらし、槍の穂先を下から唸りを上げて振り上げた。

——ブオンツ!

「く・・・!!」

剣士にとって下からの攻撃は防ぎにくい為、フロツティは無理をせずに左へ避ける。

「はあっ!」

そこへ僕が左足で回し蹴りを繰り出して、フロツティの転倒を狙った。

が、フロツティは右足を上げて脛すねの部分でそれを防ぎ、器用にも手に持った剣を振り払ってくる。

予想外というのもあるが、何よりフロツティがこれほど器用とは思っていなかった為、刃が迫って来るといのが見えた直後、体が勝手に動いていた。

—— スツ、ガキインツ！

「んなっ！？」

僕は槍をフロツティの剣に巻きつけるように伸ばし、クルリと捻って剣を弾き飛ばす。

その光景をまるで他人事のように見ている僕と、驚愕しているフロツティ。

—— ガララァン・・・！

剣が床に転がり、音を立てて静かになる。

フロツティは僕の槍と転がっている剣を何度も見比べ、呆然としていた。

それは僕も同じで、体がスルリと動いたような感覚だった。

一瞬意識が無かったように思うけど、それでも体は勝手に動いている。

不思議としか言いようが無い。

「お前、腕上げたんじゃないか？」

フロツティが剣を拾い上げながら、僕に笑みを向けて来る。

だと良いな、と軽めに返して今日はお開きとなった……。

<Side フロツティ>

「たっでいまあ！」

俺は玄関の扉を開け、少し崩れた言い方で帰りを告げる。

「おかえり。、たっでいまあ、じゃなくて、ただいま、よ」

「わっつてる」

母さんが鋭く指摘してきたがスラリと受け流し、自分の部屋へ向かった。

——パタンッ

「ふう……」

扉を閉め、ベッドに座り込む。

「リンク、どんどん強くなっていくよなあ……。リアも。気に食わねえけどテイルも……」

ドサツとベッドに倒れ込み、顔を枕に埋めた。

やべえ……。

俺、置いて行かれるかも……。

——ガバツ

俺は勢い良く体を起こし、家の外へ駆け出した。

「こら、何処行くの!?!」

母さんの怒声が響き渡ったが、気の所為だと耳に刻み込んで町の公園に駆けていく。

「はあ……。はあ……」

——ザザアツ!

公園の前で急停止し、誰もいない事を確認して中へ足を踏み入れた。

今は夜の月が公園内を照らしており、陰が色濃く映っている。

よおし、ここなら……。

俺は遊具の無い広い場所を選び、ゴツターで剣を作り上げた。

「飯食ってねえけど、まあいいか」

俺は空腹感を堪えて剣の柄を握り、素振りを始める。

——ヒュンツ、ヒュウンツ！

月光に反射して剣閃が煌めいた・・・。

<Side グラムドリンク>

「あああああつっ！！」

僕の家の中に、大絶叫が響き渡り木霊した。

「拙い拙い拙いつ！明日じゃんか実力試験っ！」

そう。

先程叫んだ訳はこれである。

長期休暇に入る前に、学校で実力試験と言う名のテストがあった。

休暇まであと3日という今日この頃。

明日は、個人が何処まで武器を扱えるようになったのかを確かめるテストだ。

「・・・」

僕はテレビの前で呆然と立ち尽くし、試験の事について脳細胞をフル回転させる。

試験。

誰だ担当の先生は？

というか生徒が先生に勝てる訳が無いよね？

つまり倒されに行けと？

地獄のような試験だな、おい。

っていうか――。

――プルルッ、プルルッ

「へ・・・？」

いきなり電話がかかり僕の思考は中止され、思わず素っ頓狂な声を出してしまふ。

誰だろ・・・。

「はい、もしもし？」

僕は相手を想像しながら受話器を取り、耳に当てる。

『Good morning!』

・・・ああ、フロツティか。

「もしも〜し、今夜ですけど〜?」

『ははっ、冗談に決まってるんだろ』

・・・決まってるならそれ相応のあいさつしなよ。

夜なのに朝のあいさつされて、こっちが反応に困るじゃん。

「で、ご用件は何でございましょうか?フロツティ君」

『お前壊れたか?まあいいや。明日の実力試験、知ってたか?』

「あっはっは〜、僕ついさっき思い出した」

フロツティの問いにかなりの棒読みで答え、引きつった笑みを浮かべる。

フロツティも困ってるのかな・・・?

『お、俺と同じか。でき、担当の先生は知ってるか?』

「担当の先生?いや、知らないけど・・・」

『さっきティルから電話あって、明日の担当先生教えてくれたんだよ。俺はガトー先生で、リンクはブナン先生。リアがルーフェ先生、

ティルはラハイグ先生だと。そんじやな』

フロツティは言う事を言つて一方的に電話を切る。

ブナン先生かあ……。

あの熱血論、如何にかならないかなあ。

というよりティルよ、そんな情報を一体何処で……？

僕は切れた受話器を見つめながら、ただひたすらティルに疑問を抱いていた。

—— チュン、チュチュンツ

家の外から小鳥の鳴き声が聞こえ、僕はベッドから体を起こす。

「朝、か……。……。試験っ！」

一気に眼が覚め、ガバツと布団をはねのけた。

ガツガツと朝食を済ませ、残った時間で槍の素振りをする。

—— ヒュンツ、ブオンツ！

軽く一振りした後、横へ一閃し薙ぎ払った。

「ニヤオ」

ふと近くの塀を見ると猫が欠伸しており、僕の素振りを呑気に眺めている。

猫は気ままで良いなあ……。

「はっ」

時間を慌てて確認し、窓から家の時計を覗き込んだ。

7時42分！

「しまった……！」

素早く槍を消して家の中に飛び込み、食器を一気に片付けてリビングへ走る。

「行ってきます！」

いつも通り写真に声をかけ、僕は学校へと走り出した。

——ガラガラッ！

「セーフ！」

「っしやあ！」

ホームルーム1分前に僕が教室の扉を開け、教室内に飛び込んだ。

それと同時にフロツティが良く来た！と天井へ拳を突き上げる。

「おめでとう。遅刻しないで済んだわね」

リアが本を読みながら手を振っていた。

「本当にな」

驚いて後ろを振り返れば、先生が出席簿を手にニヤアと笑いながら僕を見下ろしていた。

「あは、ははは・・・」

僕はただ苦笑して、自席に着く。

先生は良く間に合ったな、と頭をポンポンッと軽く叩いてきた・・・。

<Side リアファル>

珍しいわね、リンクが遅刻寸前で登校してくるなんて・・・。

天変地異でも起こるのかしら。

「はあ・・・」

私の隣で自席に着いたリンクが、間に合ったあと息をついている。

「お疲れ」

私が一声かけると、リンクはダランと机に突っ伏した。

耳を澄ませば愚痴を呟いているのが聞こえてくるが、私はクスツと笑って本に集中する。

リンクも愚痴を吐くのね。

「さあて、皆も知つての通り今日は実力試験だ。担当の先生は中央玄関の張り紙に書いてあつた通り。頑張れよ」

ガトー先生はさも他人事のように告げ、出席簿をパタンツと閉じる。

実力試験。

昨夜、ティルから電話があつて担当先生は知っているけど・・・相手がルーフェ先生とは。

先生が使用する武器を、私達は誰も知らない。

如何なるかは全く分からない訳ね、面白いじゃない・・・。

「実力には実力を。偽力には偽力を・・・」

私は本に槩しおを挟みながら、言葉を発する。

「流石リアファルだ。良く分かつてるな」

ガトー先生はニヤリと笑みを浮かべ、ホームルームは終わりを告げた。

「実力試験を始めます。試験番号1番！」

私達は訓練室へ移動し、何事も無く試験が始まる。

「はい」

試験番号1番である私は、返事をして立ち上がり訓練室内へルーフェ先生と共に入室した。

「また同じですねえ。お手柔らかに」

ルーフェ先生は相変わらずの雰囲気で、こちらのペースを崩させる。

けど、私はそこまで弱くない。

「こちらこそ」

胸に手を当てて軽く一礼し、スツと後方へ跳び退る。

先生達は跳び退った距離に驚いているが、今まで何ヶ月も修行して来た為私達にとっては普通の動きだ。

ルーフェ先生は水色のゴッターを弓に作り上げる。

「弓……。なら」

弓に弓なら経験豊富な先生には勝てない。

ならばと蒼色のゴッターで短剣を作り上げた。

「おや、あなたは確か・・・弓ではありませんでしたか？」

ルーフェ先生が今までの授業を思い出し、首を傾げる。

「いえ、一応短剣も可能なんです」

「あらあ」

上品に口に手を当てて驚くルーフェ先生だが、弓を握る左手にはゴッターが集中して矢を作り上げていた。

ルーフェ先生は矢をつがえて弦を引き絞り、矢を解き放つ。

「すう・・・」

私は小さく息を吸い、矢の軌道を正確に読み取って体を右に傾けた。

——ビュオツ

矢が私のすぐ横を通過し、訓練室の壁に弾かれて失速する。

先生が驚いている隙に短剣の鞘を腰のベルトに差し込み、私はルーフェ先生へ急接近した・・・。

12話：実力には実力を（後書き）

偽力に偽力では意味が無い。

ならば己を鼓舞し、実力をその場で見せつけよ。

13話：実力の末に・・・（前書き）

遅れました。

13話、参ります。

13話：実力の末に・・・

<Side リアファル>

——ヒュウツ、ヒュヒュンツ

私のそばを何度も矢が通り過ぎ、壁に当たって失速していた。

採点している先生達は、流れて飛来する矢にも気をつけなければならぬ。

私も弓を使っている身だから、矢の軌道くらい見ればすぐに分かる。

故に矢を避ける事は容易い。

如何しても当たりそうになれば、

——キーンツ！

短剣で弾いて、ルーフェ先生の懐に跳び込んだ。

先生はその速さに驚いて目を見開いていたが、私は素早く短剣を握り弓の弦を斬り裂く。

「あらま・・・！」

驚くルーフェ先生だが、すぐにゴッターで修復した。

ふと思う。

これ、何をすれば合格なのかしら……。

——ビンツ、ブオツ！

先生が手にする弓の弦が弾かれたように戻り、矢が宙を突っ切って放たれた。

「ツ……！」

すぐさま床に伏せて、矢が通り過ぎるのをやり過ごした直後、第二波の矢が発射される。

仕方がないわね……！

私は両足に蒼いゴツターを足に纏わせ、ルーフェ先生の懐へ急接近した。

「ツ……！？」

先生が目を見開いて驚愕している中、私は短剣にもゴツターを纏わせて一閃する。

弓が弦ごと一刀両断され、ルーフェ先生の手から落ちて消えた。

——パチパチッ

私が先生に視線を戻すと、拍手している。

「お見事ですよ〜」

ルーフェ先生が微笑みを浮かべて褒めてくれたので、終わったのだと悟り短剣を鞘に納めて消した。

物にゴツターを纏わす事は授業でまだ教えていない事だった為、先生達が上出来だと頷いている。

この分だと、リンク達も余裕の合格ね。

<Side グラムドリンク>

「お疲れ〜」

僕は訓練室から退室して来たリアに、軽く手を振って声をかける。

リアは小さく笑みを浮かべて返してくれたが、試験担当の先生が声を張り上げた。

「次、試験番号2番!」

「あ、はい」

リアに視線を向けていた僕は、そちらへ顔を戻しブナン先生と共に入室する。

「少年よ!堂々と参られい!」

「は、はい!」

対峙して早々ブナン先生は剣を作り上げながら大声を発したので、思わず直立してしまった。

「で、では……」

僕は白銀のゴッターを集中させて槍を作り上げ、左手で柄をグッと握る。

この日の為という訳ではないが、今まで修行して来た成果を見せる時。

僕は変に気合がこもり、槍を握る手に力が入ってしまった。

——ヴウヴウッ！

それはゴッターにも影響して、槍に纏わせるゴッターの量が普段より跳ね上がる。

白銀の陽炎が大きく燃え上がり、宙を揺らいだ。

先生達もその量に驚いているようだが、僕の視界にはブナン先生しか映っていない。

「ふう……」

小さく息を吸って高ぶった心を静める。

——ドクンッ、ドクンッ

それでも鼓動が静まらない時は、兄さんから教えてもらった言葉を言えば良い。

『強き者が勝つのではない。勝った者が強いと認められ、弱き者は強き者が踏みしめる戒めとなれ』

「強き者が勝つのではない……。勝った者が強いと認められ……」

僕は誰にも聞こえないような小声で小さく呟き、少しずつ心を押さえていった。

「弱き者は……。強き者が踏みしめる……」

僕は槍の柄を両手で持ち、少し体勢を低くして両足にゴッターを纏わせる。

——ドーンッ

一気に溜め込んだ力を解き放ち、ブナン先生の正面へ急接近した。

「戒めとなれ……」

心は完全に静まり、冷静な視界で自分の握る槍が振るわれるのを見ている。

まるで他人事のように槍が剣で防がれるのを目視し、体が勝手に動いていた。

あの時と、同じ感覚だ……。

「はっ！」

ブナン先生が剣を横へ薙ぎ払うように一閃。

僕は槍の穂先を床に突きつけ、槍を軸に逆立ちした状態で剣閃をか
わした。

「なんと・・・！」

ブナン先生は槍術に驚いて一瞬動きを止めるが、すぐに足で槍の穂
先を蹴って僕の体勢を崩す。

それをまだ夢のように眺めている僕の体は、スルリと宙で体勢を整
え先生の背後に着地した。

——ブオッ

槍を鋭く突き出し、背を向ける先生に攻撃を繰り返す。

「むっ！」

ブナン先生はなんの！と器用に剣を操り、手を背中に回して穂先を
剣で弾いた。

「・・・」

僕は意識の中で漂っているのを感じながらも反応を示す事が出来ず、
無言で槍を薙ぎ払う。

「む……」

それに気づいた先生は、ピクリと小さく反応した。

僕の槍はその隙を突いて、先生の首へ穂先を繰り出す。

「ぬうつ！」

先生は体を傾けて攻撃をかわし、足をはらって僕の体勢を崩した。

ガクンと視界が揺れ、僕は右膝を床に突いてしまう。

そこへ唸りを上げて剣が迫って来た。

——ガキインツ！……ガラんツ、ガララァン……！

次の瞬間、ブナン先生の剣が弾かれて宙を舞い、床に放り出されている。

僕の槍は薙ぎ払われた後が見られた。

「む、見事なり！」

剣は消え失せ、ブナン先生の高々とした大声ではっと意識が定まっ
ていく。

最近、修行中は少ないが、誰かと一戦交えている時に意識が不安定
なのは知っていた。

それを今回もまた体験してしまう。

喜んで良いんだか悪いんだか……。

「え、え？」

僕は槍と先程吹っ飛んで消えた剣の辺りを交互に見つめながら、何があつたのかを思い出そうとする。

「覚えとらんのか、少年」

「え、あ、はい。いつの間にか……」

意外にもブナン先生が声をかけてきたので、慌てて言葉を返した。

「なら教えるが……自分で槍を剣に巻きつけるようにして弾いていたぞ」

あ、フロツティにも使った槍術だ。

僕はブナン先生の言葉でうっすらと思い出してくるのを感じながら、訓練室を先生と共に退室していく。

「良かったぜ」

出るとフロツティが拳を突き出してきたので、軽くコツンとぶつけ笑みを返した。

実際ほとんど覚えて無いけどね。

その後数人試験を終え、先生には敵わなかったようだが僕的には合

格だろつから、問題無いと思う。

「試験番号8番！」

「はい！」

担当先生の声と共にフロツティが返事をして立ち上がり、訓練室へ入室していった。

<Side フロツティ>

俺とガトー先生が距離を置いて互いに剣を握り、対峙する。

ガトー先生のゴツターは黄色らしい。

「フッフッフ、ついにこの時が来たぞフロツティ君」

先生は眼を怪しく光らせ、冗談気に笑みを浮かべた。

・・・眼が冗談じゃねえぞ、あれ。

紫っぽく光ってるじゃん、怪しいオーラ全身から放ってるじゃん！

「き、危険を感じる・・・！」

俺は思わず冷や汗を流し、足に力を込めた。

「危険など何も無いのだよお？フロツティ君んんっ！」

フハハハなどと高笑いを浮かべながら、先生が急接近してくる。

接近後の先生の表情からは笑みが消えており、真剣そのものだった。

俺はその表情ではつとなり、左側から迫って来る刃を視界の端で捉える。

——ガギイツ！

左腕を立てて支えにするようにして剣を当て、先生の攻撃を側面で防いだ。

「お見事お！」

先生はそう叫びながら、物凄い力で俺をそのまま薙ぎ払う。

「うおう！？」

吹き飛ばされながらも体勢を整え、ザザアツと足で急ブレーキをかけ急停止した。

足だけでは止まりにくかった為、空いた左手を床に突きつける。

「あっち！」

摩擦で焼けるように熱くなった左手を我慢し、休みを与えず接近して来た先生に剣を構えた。

足に紅いゴッターを集中させ、跳躍力を上げる。

——ダンッ！

思い切り跳び上がり、天上近くまで来ると当然の事ながら落下を開始した。

剣先を床に向け、両手両足にゴッターを集束させる。

先生は容赦無く剣を構え、落ちて来る俺を待ち構えていた。

へっ、そう簡単にやられるかってんだ・・・！

——ビュオオツ・・・！

風を切る音が耳元で唸り、地面が近い事を視界が知らせる。

「どりゃあぁっ！」

先生は床寸前まで落ちてきたところを狙って、剣を横薙ぎに振り払った。

が、それを予想していた俺はもともと突き立てていた剣で防ぎ、開いた左手で地面を強く押しこむように着地した。

一瞬逆立ちのようになり、クルリと反転して足を下ろす。

足にゴッターを全て集め、鋭く踏み出して先生の懐に突っ込んだ。

剣を素早く逆手に持ちかえ、柄の先端で先生の額を思い切り突く。

——ゴンッ！

見事な鈍く痛々しい音が響き、先生の意識が一瞬揺らいだ。

その隙にパンツと柄で先生の手首を突き、剣を床に落とす。

先生の意識が戻った時には、すでに剣は手元から離れ床で僅かに震動しながら転がっていた。

「おお、いつの間にかすごい力をつけてるな！」

先生が俺を頭をグシャグシャにしている間に、互いの剣は消えている。

「この野郎、先生のデコを突くとは良い度胸してるじゃないかあ！」

ガトー先生がニタアと怪しげな笑みを浮かべた瞬間、俺の悲鳴が木霊した事を記しておく。

・・・いや、マジで痛かった・・・。

<Side テイルヴィング>

隣のクラス、まあリンク達がいるクラスが終わって、次は私達のクラス。

「試験番号1番！」

「はいっ」

私は立ち上がって訓練室へ入り、ラハイグ先生と相対した。

今まで本を読んでいたラハイグ先生も、閉じて懐に本をしまい、緑色のゴツターを身に纏う。

それを右手に集め、短剣を作り上げた。

へえ、緑色のゴツターなんだ……。

「私と同じですね」

私も同色のゴツターを左手に集中させ、鞘に納刀された刀を出現させる。

「参ります!」

柄を右手で掴み、左足を1歩退いた。

「嶺?流……」

両足にギュツと力を込め、重心を下へ落とす。

——ドッ!

「抜剣!」

先生の懐へ高速で移動し、鞘から刀を抜き放った。

——ガギイツ！

ツ・・・！？

先生は動揺した風も無く、極簡単に短剣で見事に防いでみせる。

短剣という短い刃で、刀という長剣を揺れる事無く防がれた。

すごい・・・！

いや、それよりも・・・。

先生とは言え、私の嶺？流をいとも簡単に防がれカアツと頭に血が昇る。

——ヴヴヴヴッ！

全身にゴツターを纏い、先生の力を押し去っていった。

「ッ・・・」

先生の瞳が僅かに揺れたが、短剣をいきなり反らして私の体勢を前へ崩す。

が、すぐに右足を出して踏み止まり、逆手に持った鞘を振り上げるようにぶつけた。

「ッ！？」

まさか鞘で来るとは思っていなかったのか、先生が慌てて短剣の側

面で防ぐ。

「嶺？流・・・逆打ち」

私は鞘に力を込めたまま、右手の刀を逆手に持ちかえ背の部分で先生の手首を叩いた。

——カララアンツ・・・

短剣が音を立てて床に落ち、姿を消す。

私は刀を鞘に納めると、先生に一礼した。

スツと先生も礼をして返し、良かったですよと小さく呟く。

スウツと血が下がり大きく息を吐いた。

後から聞いたけど、リンク達も合格したらしい。

私？

私も勿論合格だよ。

さあて、無事実力試験も終わったことだし・・・アンダーヴェルトに乗り込むとしますか・・・。

13話：実力の末に・・・（後書き）

少年達は敵に挑む為、アングーヴェルトへ旅立つ。

その道を塞ぐは好敵手・・・。

14話：グラスタの怒り（前書き）

今回でリンクが・・・！

14話、参ります！

14話：グラスターの怒り

<Side グラムドリンク>

早朝。

まだ太陽が起き始めて間も無い頃、僕は身支度を整え写真の前に立っていた。

母さん、父さん、兄さん……。

「行ってくるよ」

母の形見である蒼い宝石が埋め込まれたペンダントを握り、改めて首にかける。

写真に写る家族を見つめ、背を向けた……。

時刻は午前6時、場所は西部公園。

そこに現地集合という事になっており、僕は急いで向かう。

到着すると、3人共着いていた。

フロッティは青いジャケットに身を包み、リアは膝まである長い上着を着込んでいる。

ティルはTシャツにもう1枚服を重ねていた。

因みに僕は普通の服だよ、悪かったね……。

「遅い」

ティルが頬を膨らませて腕を組み、僕に文句を言ってくる。

「ごめんごめん」

「睡魔に襲われて起きませんでした、とか言っ言い訳は無しよ」

リアが本を読みながらも、鋭く指摘してきたので思わずビクリと反応してしまった。

「お、凶星？」

「ち、違っからっ」

茶化してきたフロツティに、ムツと言り返す。

フロツティが早くやれよ、と肘で僕を突いてきた。

その行動の意味を悟り、ポケットからラケン・ウダーホルトを取り出す。

実力試験を終え、長期休暇にも入った。

思い残す事は無い訳だし……え、フロツティ達は如何なのかって？

まあ、家族もいる訳だし心配されるんじゃないかって？

いや、本人達は行く気満々だしなあ・・・何か置き手紙でも残してきたのかな・・・？

「それじゃ、行くよ！」

僕が掛け声をかけると、3人はコクリと頷いた。

「おう！」

「OK！」

「ええ」

フロッティとティルが拳を共に打ちつけ合い、リアが軽く微笑む。

公園内で紅い粉が舞った・・・。

<Side ゲイボルグ>

先程、また同じく侵入者を追い払え、という命令が出た。

あいつ等は何故こつ何度もこちらへ尋ねて来るのか、理由が分からない。

「シャシュカ、出るぞ」

待機部屋でのんびりとくつろいでいるシャシユカに声をかけたが、面倒くさそうな視線が返って来た。

「行くの嫌やなあ・・・」

バツと着物を羽織い、グラディウス達と共に出撃するシャシユカ。

漆黒の組織装備を身に纏い、拠点を後にした。

広大な荒れた大地の中央、そこに奴等がいる。

組織に所属する運送役の巨鳥を目にした途端、警戒心を露わにした。

俺達は距離を置いて着陸し、巨鳥が組織の拠点へと帰還する。

「何故お前達は何度もこちら側へやってくるのだ・・・」

俺がいい加減任務を増やさないで欲しいと思いつつながら、奴等へ問いかけた。

「悪いけど今回は来たくて来たんだ」

グラムドリンクは全身にゴッターを纏い、槍を創生する。

他の者達も剣や弓、刀等を作り上げた。

・・・戦闘か。

<Side グラムドリンク>

「師匠、よくも倉庫を燃やしてくれましたねえ〜？」

テイルが怒り気味の低い声でそう言い、鞘をグググと握りしめる。

「おお、やっぱり怒っとるかいな」

「当然ですっ！」

バチバチと火花を散らすテイルに、思わず苦い笑みを浮かべるシャシュカ。

いつの間にそんな事を・・・とグラディウスがシャシュカに呆れた視線を向けていた。

「問答無用お！参ります！」

——ドッ！

足にゴッターを集中させ、シャシュカの懐へ突っ込むテイル。

「いきなりかいな・・・！」

トンツと後方へ跳んで一閃された刀身を避けるシャシュカ。

「おじさん行くぜえ！」

「誰がおじさんかあ！」

フロツティがグラディウスを挑発し、剣と剣が交える。

——ピンツ、ヒュオ

「おや？」

ステイレットのすぐ横を矢が通過し、ステイレットはリアへ視線を向けた。

弓を構え、次の矢をつがえているリア。

「戦闘は好まない方なのですが……」

仕方ありません、とステイレットは短剣を作り上げて右手に握り構える。

「戯言を……」

リアは小さく呟き、第二波を射た。

——ウウン……！

僕は穂先をゲイボルグに向け、槍を構える。

今度は意識が飛ばないようにしないと……。

ゲイボルグも槍を作り上げ、右手で握る。

「ラケン・ウダーホルト。いろいろと調べさせてもらったよ。こっちに研究好きが結構いるんだ」

「なるほど・・・？それで、目的は何だ」

ゲイボルグは特に動揺した風も無く、鋭い隻眼でこちらを睨んでいた。

返答が挑発的だった為、思わずムツとして僕は口を開く。

「分かったからこそ、放っておく訳にはいかない。それが僕達で一致した意見だ・・・！」

僕は瞬時に両足へゴツターを集め、ドンツと飛び出した。

ゲイボルグの正面まで地面すれすれを滑空するように急接近し、槍を横薙ぎに振り払う。

「ツ・・・!？」

ゲイボルグの隻眼の瞳が一瞬揺れ、それでもすぐに槍を盾にして僕の斬撃を防いだ。

防いだ瞬間だった。

フツと意識が飛んだような感覚に襲われ、夢を見ているように感じる。

飛んだ・・・。

——ブオンツ

僕は槍にゴツターを集中して破壊力を上げ、そのままゲイボルグの槍を突き飛ばす。

「何・・・!?」

足に力を込めてズザアッとブレーキをかけるゲイボルグに、間髪入れず穂先を突き出した。

——ガギイツ!

ゲイボルグは槍の柄で攻撃を受け流し、左手に平で僕の額を突く。

僕の手から槍が離れ、ゲイボルグが槍を遠くへ弾いた。

が、僕は両手に短剣を作り上げて構える。

「短剣、か・・・」

ゲイボルグは臆する事無く槍を構え、穂先の部分に黒いゴツターを集中させた。

——ブオンツ!

ゲイボルグは槍を振り上げるように一閃し、穂先から剣風によって衝撃波が巻き起こされ僕に唸りを上げて飛来する。

体が警報を鳴らしていた。

それを遠くで聞きながら、意識の中に漂う僕は横へ跳んで避ける。

—— ザシューウンツ！

衝撃波は地面に亀裂を刻み、空気に溶け込んで消滅した。

—— ザッ

横へ跳んだ僕の足は素早く方向を切り替え、ゲイボルグのもとへ駆け出す。

右手に持つ短剣で斬りつけた。

ゲイボルグは何とも無いように槍の柄で受け、力で押し返そうとする。

が、僕は左手の短剣を振るい、ゲイボルグの左脇腹を斬った。

否、手応えを感じなかった為、斬ったのは服だろう。

「フツ……」

体勢が前へ傾いている僕を横目で確認したゲイボルグが、口元に笑みを浮かべて僕を蹴り飛ばした。

蹴られても僕の意識ははっきりとせず、地面を一度バウンドして体勢を整え足で急ブレーキをかける。

—— スザザアッ！

砂埃を上げながら停止し、左手の短剣を逆手に持ちかえた。

<Side ゲイボルグ>

何だこの少年は……。

意識が不安定だと言うのに、以前の時と比べ物にならない。

いや、不安定だからここまで闘えるのか。

とにかく邪魔をされては任務に支障が出る。

早々に退陣してもらわねば……。

とはいえ、俺も司令官の弟君を殺したくはない……。

——ヒュンッ

「ッ……!?!?」

突如グラムドリンクが逆手に持ちかえた短剣を投じてきた為、俺は瞬時に首を右へ反らして避ける。

いきなりだ。

手にゴッターを集中させて振るう速度を上げたか……。

戸惑っているのはこちらが殺られる。

ここはアンダーヴェルト。

弱肉強食の世界だ。

『強き者が勝つのではない。勝った者が強いと認められ、弱き者は強き者が踏みしめる戒めとなれ』

司令官がよく自分を鼓舞す言葉として呟いていたのを思い出し、俺もそれを心の中で唱える。

不思議と静まっていき、冷徹な思考を取り戻す事が出来た。

司令官には悪いが、2度とこちらへ来ようとは思わぬ程痛めつけるしかなさそうだ。

——ヴヴヴヴ……！

俺は黒いゴツターを全身に纏い、槍を体の一部として扱う。

グラムドリンクが両足に力を込めるのを見た。

来るなら来るがいい……。

——ダッ

先手を打ったのは向こう。

短剣を素早く操り、槍では対抗出来ないように動きを鋭くしてきた。

「甘い・・・」

——ザッ

俺は足を踏み切り、向きを変えてグラムドリンクの背後へ回り込む。

「隙だらけだ」

——ザシュッ！

俺はこちらへ振り返ろうとしたグラムドリンクに槍を突き刺し、見事左脇腹を貫いた。

<Side グラムドリンク>

何だ・・・？

脇腹、それも左辺りに熱いのが・・・。

いや、違う。

一瞬焼けるように燃え上がったかと思うと、今度は激痛が身を貫いた。

一気に夢の感覚から引きずり出され、短剣が地面に転がる。

「ぐっ・・・かはっ！」

力を無くしたように地面へ体を預け、そこからは意識が無かった・・。

<Side フロツティ>

あいつ、リンクを槍で突き刺しやがった・・!

俺は目の前にいたグラディウスの事など忘れ、ゲイボルグへ駆け出そうとする。

だが、突如リンクが大声を上げゴッターが天へ伸びた。

「な、何だ・・!?!」

俺は思わず足を止めて空を見上げ、ヴォーゲルが姿を現すのを凝視する。

「詠唱してないぞ・・!」

あり得ないと眼を見開き、リンクが地面に倒れるのを見て慌てて駆け寄った。

「大丈夫か!?!おい、リンク!」

俺がいくら声をかけても眼を覚ましてはくれず、ただ出血の量が物凄いいというだけ。

やばいだろこれは・・・！

そう思った直後、風がリンクを包み脇腹の傷を塞ぐ。

俺はバツと空に滞空するヴォーゲルを見上げ、驚愕した。

いつもは白銀に光っていたヴォーゲルの瞳が、憎しみの炎に燃えて真っ赤に染まっている。

『貴様、我が主をここまで傷つけ、生きて帰れると思うな・・・！』

腹の底に響く深い声で、ヴォーゲルがゲイボルグに言い放った。

ヴォーゲルはリンクが主という事を誇りに思っていたようだし、何より忠義が厚い。

流星に怒るとは思うけど、俺もここまで怒ったヴォーゲル見るのは初めてだ。

——ゴオオオオツ！

ヴォーゲルがその身に竜巻を纏わせ、攻撃態勢に入る。

「やむを得ん、か・・・」

ゲイボルグが、それを見るなり黒いゴッターを出現させた。

「我が乞うは黒き鉤爪。刃もろとも天を裂け・・・ラーヴェ」

ゴッターが渦巻き、黒い獅子が姿を現す。

グルル・・・！と深く唸り、その場に腰を据えた。

ヴォーゲルが口に風を集中し始めると、ゲイボルグがスツと手を上げてラーヴェエに構えの合図を送る。

ラーヴェエが無言で体を起こし、体勢を低くして脚に力を入れた。

「ゴアッ！」

ヴォーゲルが竜巻を放つと同時に、ゲイボルグが手を振る。

それと同時にラーヴェエが飛び出し、その鉤爪で竜巻を斬り裂いた・・・。

14話：グラスタの怒り（後書き）

主を汚された事により、我を忘れる古鳥。

獅子は勝利をもぎ取るか・・・。

15話：向かい入れるは（前書き）

新たな仲間が登場します。

15話、参りましょう！

15話：向かい入れるは

<Side フロツティ>

リンクが重傷を負い、ヴォーゲルが暴走してゲイボルグのラーヴェと戦闘する。

「様子は・・・？」

いつの間にか俺の隣にリアが立っており、リンクの様子を聞いてきた。

ヴォーゲルの風で傷は塞がっているものの、意識は戻らない。

「分からん！つか俺が聞きたい！」

「分かったから頭下げなさい。刺されたくなくなったらね・・・」

リアは俺の言葉を受け流し、無理矢理俺の頭を抑え込んで前へ体勢を崩させた。

もともと地面に膝を突いていたものの、思わず手を突いて体勢を戻す。

——ヒュンッ

その直前、俺の頭上を短剣が通過した。

はっと視線をやると、俺の後ろに立っていたリアを狙うスティレット

トが、次の短剣を放つ。

「おおぅ!?!」

反射的に右手で持っていた剣を使って、迫って来る短剣を弾いた。

すると、テイルの奴もこちらへ走って来る。

「もう師匠つてば加減してくれないんだからっ!」

愚痴をこぼしながら切り傷を負った右腕を左手で押さえ、ダランと垂れ下がった右手で刀を握る。

「リンクは?」

「やかましいっ。俺が知りたいくらいだって、さっきから言ってるだろが!」

「何その言い方!」

戦場で呑気にいがみ合う俺達を見かねて、リアが短剣の鞘で俺とテイルの頭を突いた。

衝撃が頭の中で反響したが、我慢して堪える。

「って〜!」

「酷い・・・!」

テイルも若干涙目だが、リアは厳しい顔つきだ。

「退くわよ」

「え、ええ？」

リアにガシツと腕を掴まれた俺は、成すすべ無く連行される。

ティルがリンクを背負ってその後に続き、俺達はヴォーゲルを背にして立ち去った。

「如何して逃げるんだよ！おい、リア！？」

俺は引つ張られながらも声を張り上げ、撤退を指示したリアに怒る。

少し離れた平野に到着すると、漸く手を放してくれたリア。

見ればティルも理由を聞きたいと、眼で訴えていた。

「私達ではまだ勝てない。もっと経験が必要。これは理解出来る？」

リアの確認に、俺とティルは一度顔を見合わせてリアに視線を戻し頷き返す。

「ならあの時が一番撤退しやすい時だったというのも、理解出来るかしら？」

「でもヴォーゲルを置いて来ちまったぞ！」

俺は仲間を置いてきた事に苛立ち、リアに詰め寄った。

すると、もう一度鞘で頭を突かれる。

「ヴォーゲルは負けないわ。怒ると余計にね……」

意味深な笑みを浮かべ、リアが微笑んだ。

それが少し恐ろしくも見えたが、気の所為という事で終い込む。

「如何して分かるの？」

リンクを地面に下ろしたテイルが、不安げに問いかけた。

「あなた達はまだ知らないでしょうけど、私とリンクは幼馴染。勿論リンクが所有しているグラスタの事だって知ってるわ」

「ええ！？リンクとリア姉って幼馴染だったの！？」

「初耳だぞ、おい！」

俺とテイルは眼を丸くしてお互いに顔を見合わせ、リアを見る。

「ヴォーゲルはグラスタの中でも高位の魔物。そう簡単に敗れはしない。主が重傷を負い、冷静さを欠いている今では、勝てるか如何かは五分五分だけど……私も、あそこまで怒ったヴォーゲルは初めてだから」

リアはスツとリンクに視線を落とし、思いつめたような表情を浮かべた。

過去に俺達でも知らない何かがあったかのような、そんな暗い表情・
。。。

一体、何があったって言うんだよ。。。。

<Side ゲイボルグ>

奴等を見す見す逃がしてしまうのは如何かと考えたが、まずは眼前にいる敵に集中すべきだ。

この古鳥、怒って冷静さが吹き飛んでいるのにも関わらず、野生の勘でラーヴェの動きを先読みしている。

グラディウス達が攻撃しているものの、すぐに風が吹いて回復された。

「グオウツ！」

ラーヴェが竜巻をかわして地面に着地するも、蓄積したダメージで体勢が崩れる。

そこへ新たな風の刃が迫り、ラーヴェを包み込んだ。

「グオオアアツ!？」

地面をすべるように放り出されるラーヴェ。

「く・・・！」

如何する事も出来ず、眼の前に佇む古鳥を見上げて俺は苦渋の決断を下した。

「撤退！」

俺の合図を予測していたかのように、ステイレットが藍色の巨鳥インデイヒを召喚する。

俺達は止む無く撤退した・・・。

<Side グラムドリンク>

ヴォーゲル・・・ヴォーゲル・・・。

僕は揺らぐ意識の中、最後に見た白銀の巨鳥を呼んでいた。

水面から上がるように僕の意識は浮上し、抵抗する重い瞼を開ける。

一番最初に飛び込んで来たのは、先程まで思っていた白銀。

「ヴォー・・・ゲル？」

僕が小さく声を発すると、ムクリとそれは動き巨鳥が体を起こした。

『主、起きられたか』

僕ははっとなつて体を起こし、状況を確認する。

景色は森。

皆の姿は無い。

リアの判断だろう。

見つかりにくい森へと逃げ込んだ、そんなところだ。

『主が重傷を負ったのを感じ、知らぬ間に暴走していたらしく情けない。真に申し訳無い……』

「良いよ、そんな事。怪我治してくれたしね。それより皆は……？」

『食料を探しに行く、と言って森の中へ。主は大人しくしているよう、リアファル殿から言われている』

だよねえ……ははは。

僕は思わず苦笑して、皆の帰りを待った。

ふと思い出して、僕のそばで身を大地に預けているヴォーゲルに礼を言う。

「ありがとう。温めてくれたんだ」

寝ている間、体が温かいのを不安定な意識の中で不思議に思っていたのだ。

『それくらいしか出来なかった。許せ』

こっちが礼を言っているのに、何で謝って来るのかなあもつ。

不器用なヴォーゲルに苦笑いを浮かべ、僕は天を見上げた。

青空に、白い雲。

良いよねえ、ああいう空ってさあ……。

そんな静かなる時を、騒がしく打ち破ったのはフロツティの大声だった。

「あ、起きてる起きてるっ！」

両手にいっぱいの木の実を抱え、フロツティを先頭にリア達も戻って来る。

「おかえり、心配かけてごめん」

頭をかきながら謝ると、良いって良いってと笑って返すフロツティ。

それより！とフロツティが木の実を1ヶ所に集めて、僕の腕を引っ張る。

「こっち来てみる。すごいのがいた！」

……いた？

あつたじゃなくて……？

ヴォーゲルはブアツと翼を広げて僕等の上空を飛行し、僕達は森の中にある湖へやって来た。

「え……」

湖の光景を見た僕は思わず啞然とし、横にヴォーゲルが着地したのにもしばらく気づかない程である。

湖の岸に龍がいた。

全身が水で出来ている為、向こう側が透けて見える。

そしてその体に、雷のような鎖が纏われていた。

だが、どうも弱っているらしく生気をあまり感じない。

「えっと……ヴォーゲル」

『承知した』

僕の意図を理解してくれたヴォーゲルは、尾羽をスツと上げて癒しの風をおくる。

風は龍の体に纏われ、駆け抜けた。

途端、生気が漲り閉じていた双眸が開く。

深い蒼を称えた瞳が、僕等を見つめ思わず固唾を呑み込んだ僕。

蒼き龍はムクリと体を起こし、その眼を周囲に向けて状況を確認するよつに見まわした。

『傷の治療、感謝します』

眼前にいた僕へ頭を下げ、礼を言って来るもんだから慌てて違つ違つと手を振る。

「僕じゃなくてヴォーゲルなんだけど・・・」

『我は主の配下。主の指示で動いたまでだ』

は、配下つてヴォーゲル・・・。

別にそんなつもり無いんだけどなあ・・・。

『貴殿は何者か』

ヴォーゲルは白銀の眼を龍まなこに向け、名を尋ねた。

『私はヴァシル。水龍のヴァシルです』

龍——水龍ヴァシルは湖の水を体に纏い、名を告げる。

リアが如何して弱つていたのかと尋ねると、ヴァシルはクルリとその長い身を丸めて湖面に居座つた。

『少々いざござがありまして、勝ちはしましたが怪我を・・・という訳です。無礼とは存じますが、私をあなたの配下に加えていただけないでしょうか・・・？』

ヴァシルが僕を見ながら突拍子も無い事を言うので、思わず啞然とする僕。

「え・・・？」

返答に困る僕だが、ヴォーゲルは鋭く反応した。

『別に構わぬが、下ると言うならば忠誠を誓われよヴァシル殿』

『もとよりそのつもりです。ご心配無く・・・』

「え、ちょ、待つ・・・！」

勝手に話が進んでいくので、思わず慌ててしまう。

フロツティに至っては良かったな！とこちらを祝う方らしく、味方がいない。

いや、別にヴァシルをグラスタにするのは嫌じゃないけど、そんな急に言われても・・・。

『断れてもこちらは文句など言えません。ご判断を』

ヴァシルは僕の判断を待ち、判断が下るまで双眸を閉じた。

「え、えと・・・」

僕は頬をかいて如何するか迷う。

ヴァシルが嫌いな訳じゃないし、拒む理由も無いし……。

「うん、分かった」

僕がコクリと頷くと、ヴァシルは顔を上げて頭を下げる。

「仲間増えた〜！」

「イエー！」

「騒がしいわよ……」

パチパチと手を叩くティルはフロツティとハイタッチし、それにリアが呆れた。

ヴォーゲルはもう護衛を付けなくても問題無いと判断し、アンダーヴェルトの天へと飛び立つ。

『用があれば呼ばれよ、我が主』

一言言い残し、翼を広げて舞い上がるヴォーゲル。

「えと、じゃあ契約しようか」

僕は契約を促すと、ヴァシルはスルリと丸めた体を伸ばし両目を閉じた。

僕は全身にゴッターを纏い、契約を開始する。

「汝、我が指示に従うか」

『はい』

「汝、我が危機を救い我を守護する事を誓うか」

『はい』

2つの規則を済ませ、最後の関門に移った。

「汝、我に忠誠を誓うか」

『はい』

ヴァシルは顔を上げて蒼い瞳で、僕を見据える。

僕は1つ頷いて最終の決定を下した。

「汝を我がグラスタとして認める。汝は我のグラスタであり、我は汝のソーサリーとす」

その言葉を言い終えた直後、ヴァシルの体が一瞬白銀のゴッターに包まれる。

これで契約完了だ。

『感謝します』

ヴァシルは頭を下げ礼を言ってくる。

『私はこの湖におります故、用があればお呼び下さい』

ヴァシルは湖に溶けるよう潜り込み、姿を消した。

「頼もしい仲間が増えたじゃない」

リアがクスツと笑って、僕の肩をポンポンツと叩く。

照れて頬をかく僕だが、ふと気づいてティルに声をかけた。

「僕、ティルのグラスタ見た事無いんだけど・・・」

「え、そうだった？じゃあ秘密」

ティルはからかって教えてくれず、僕は思わず頬を膨らませる。

「教えなよ〜！」

僕達は言い合いながら、木の実を集めた場所へと引き返した・・・。

15話：向かい入れるは（後書き）

新しく加わった水龍。

少年達は森の中を彷徨う……。

16話・崩れる心と堕ちない心(前書き)

今回は遂に・・・!

16話、参りますよ!

16話：崩れる心と墮ちない心

<Side ヤルングレイプ>

「そうか・・・それなら撤退は仕方無いな」

俺はゲイボルグから報告を聞いて頷いた。

古鳥は強いだろうな・・・。

仕方ないか。

「俺が出る」

俺が椅子から立ち上がると、ゲイボルグはさも驚いたように隻眼を見開いた。

「少し警告しに行くだけだ。下がってくれ」

「はっ」

ゲイボルグは瞬時に姿を消し、俺だけとなった。

さあて、弟に説教と行くか・・・。

俺は漆黒の衣服を纏い、肩に鎖をかける。

これは司令官の証を現していた。

<Side グラムドリンク>

「よおし、飯も食ったし出発しようぜ！」

フロツティがおお〜！と拳を突き上げて僕達を促す。

リアが読んでいた本をパタンツと閉じ、テイルは素振りをしていた刀を消してOK〜！とサムズアップした。

テンションが高いフロツティとテイルが共に先頭を行き、その後を僕とリアがついていく。

・・・ついていく？

ちょっと待て！

「フ、フロツティ？これ何処に向かっているの？」

僕は不安を抱きながらフロツティに確認してみたが、目的地？んなもん知るか、という返事が返って来た。

直後項垂れる僕に、リアが励ますようにポンと手を置く。

「あの2人に先頭を行かせたのが拙かったわ・・・」

リアも後悔しているようで、フロツティとテイルに先頭交代を言い渡した。

文句を言いながらも、後ろへ下がる2人。

僕はとりあえず気を引き締め直し、先を目指す。

「で、何処に向かっているの？」

「知らないわよ。とりあえず奴等が去っていった方向に進んでるだけ」

目指している場所があるだけでも良かった。

流石リア・・・と内心安心してはいる僕だが、リアが歩を止める。

一瞬で弓を矢を作り上げ、弦につがえて引き絞った。

「何・・・？」

僕はリアが狙う先を見つめ、空に影が差すのを目視する。

——バサッ、バサッ・・・！

「竜・・・！」

僕はその巨大な姿を捉え、呟いた瞬間リアが弦を放した。

——ヒュンッ！

弦が弾く音と、矢が一直線に進む姿を見聞きしながら僕は槍を創生する。

竜は矢など簡単にその鱗で弾き返し、地上に降り立った。
黒。

全身が黒い、巨大な竜。

フロツティもテイルも、いつの間にか自分の得物を手にしていた。

竜の背中から人影が現れる。

「・・・久しいな、リンク」

——ドクンッ！

「え・・・」

何処かで聞いた事のある、優しい声。

家にある写真立てが目の前で浮かび、空気に溶けるよう消えたかと思つとその人物が視界に入つて来た。

「兄・・・さん？」

僕と同じ銀髪で、その眼は僕と違って金色に輝いている。

その身には黒い衣服を纏い、肩から鎖を伸ばしていた。

その衣服が、あまりにもゲイボルグ達と酷似している・・・。

「再会を言びたいところだが、そういう訳にもいかない」

兄さんは一度眼を閉じて今度は僕達を睨んだ。

その右目が魂の無いような、光の無い瞳をしている事に気づく。

「ブイオ・アストーレ、西塔司令官の役において・・・お前達を排除する」

え・・・？

<Side リアファル>

何ですって・・・？

西塔司令官・・・ブイオ・アストーレ・・・！？

つまり、敵？

私は自分の耳を疑って確認の為リンクを見たが、リンクも信じられないような表情を浮かべている。

フロツティを見てみると、如何なってるんだ！？と視線で訴えられた。

「・・・！」

私は静かに歯ぎしりし、リンクの兄さんヤルングレイプ——通称グレインさんが言った事を信じるとする。

この状況で向こうが嘘をつくとは思えない。

だとすれば・・・グレインさんはこちらを倒す気でいる。

グレインさんは学校なんて私達よりも前に卒業しているし、4つ年上。

リンクが言うには、武器も全般扱えるらしく結構優秀だったとか・・・。

・・・勝てるのかしら。

「——て」

リンクが俯いて小さな声を発した。

「如何して・・・そっちに付いたの・・・？」

「・・・知らなくて良い」

グレインさんは眼を細めて、素っ気なく返す。

恐らくリンクや私達を追い払おうとしているのだろうけど、私達だつて生半可な覚悟でここへ来た訳じゃない。

落とし前は付けて帰らないと、親に合わせる顔が無いのよ・・・。

私はふと視線を後方へ向けてフロツティとテイルを見れば、2人は頷き闘う気満々だった。

まあ、今回はかりは同じくね。

——ヴヴヴヴツ・・・！

私は矢にゴツターを纏わせ、一気に解き放つ。

狙いは竜の首元。

——ブオンツ！

竜は急に飛び立って矢をかわし、上空を旋回する。

「我が乞うは紅き炎。立ち塞がる物を焼き払え！」
「ロター！」

フロツティが詠唱して紅鳥を呼び出した。

「我が乞うは鋭き視力。逃す事無く敵を射よ」・・・ファルケ

私も詠唱して鷹を呼び、それを見たテイルも全身に緑色のゴツターを纏う。

静かに詠唱を始める。

「我が乞うは世界の破片。我を守り、我を助けよ」・・・
能力^{ファケイト}

テイルの足元に、3本の尻尾を持った子猫が出現した。

それを見て思わず眼を見開く私達。

この猫が闘うのかと思ったからだ。

「ニャー」

猫はこの状況が分かっているのか、呑気に毛づくろいなどしている。

「ずいぶんと嘗められたものだな・・・」

グレインさんが上空からそれを眺め、口元に笑みを浮かべた。

竜はこちらへ急降下し、襲撃してくる。

「嘗めてません」

テイルは急に真剣な顔になり、左手に持っていた鞘から刀を抜き放った。

「ファケイト」

『任せて〜』

猫の尻尾がウネウネと宙を彷徨った後、ボウツと尻尾の先端に火球が現れ、テイルの刀に燃え映す。

テイルはギョツと靴底に力を込め、降下してくる竜に狙いを定めた。

「嶺？流・・・」

——ゴオオオッ！

突如炎が燃え盛り、私達は思わず距離を取る。

次の瞬間テイルが姿を消したと思えば、竜の真正面に出現した。

「烈火^{れつか}！」

刀を一閃し、炎の衝撃波が竜を包み込む。

やったと思った直後、炎が風に吹かれたように薙ぎ払われた。

「速度は良いが、詰めが甘いな」

グレインさんが右手に剣を持っている。

「嘘・・・あの一瞬で・・・」

私は一瞬呆然としていたが、槍を持つリンクの手が震えている事に気付いた。

悲しみ、恐怖、怒り。

そのどれかがリンクを覆っているのは、私でも分かる。

「我が乞うは深き水。その海底に敵を沈めよ・・・ヴァシル」

——ザアアアアアアアアッ！！

リンクの周囲を水が渦巻き、ヴァシルが出現した。

『これほど早く出陣の命が下されるとは、予想外でした・・・』

ヴァシルは穏やかな声を発しながらも、その体には蒼い雷が走っている。

——バチバチィッ！

ヴァシルは水龍でありながら、雷も操る事が出来るようだ。

リンクは先程からずっと俯いており、スツと竜を指差す。

ヴァシルは主従関係で結ばれている為、リンクの意図を悟って天を駆け抜けた。

それと入れ替わるように、勢いを失ったテイルが落下を開始する。

「ファケイト！」

『うん』

テイルの呼びかけに答え、ファケイトの尻尾から風が吹き荒れてテイルを宙で浮かせた。

私はここまで来て、ファケイトの役割が見えて来る。

ああ、そうか。

この子は、前衛のテイルを力で保護する役目。

一方ヴァシルは口を大きく開き、そこへ何かを集束させている。

—— オオオオオオオツ・・・！

途方も無い力の渦だ。

蒼色をしたそれは、束縛されていた力が無くなったかのように解き放たれ、砲撃として竜に襲いかかる。

「ゴアアアアアツ！」

対して竜も口から黒い炎を吐き出し、砲撃に応戦した。

—— バチバチツ、バチインツ！

ヴァシルの体を伝っていた雷が、砲撃を駆け抜けて竜に到達する。

竜の体を駆け巡り、その体を痺れさせた。

飛ぶ力を失った竜が落下を開始するも、痺れている時間が異常に短くすぐに体勢を立て直す。

「ファルケ」

私が一声発すると、それを聞いたファルケがヴァシルの援護を開始した。

ファルケが大きく羽ばたくと、羽が幾つか宙を舞う。

それが矢羽に変化し、竜へ雨のように降りかかった。

「面倒だ、焼き払え」

——ゴオオオオオオオツ！

森に黒炎が燃え移り、周囲は煙に包まれる。

「けほっ、けほっ」

私は口を押さえて咳き込み、ファルケが翼で覆って守ってくれた。

その視界の端で、上空の竜が去っていくのを確認する。

ローターもフロツティを覆っているが、ティルは地面でうずくまっていた。

ファケイトを抱いて守っている。

まさか、ファケイトの力はティルを援護するだけの物だと言っの…？

「ファルケ…！」

私の意図を悟ってくれたファルケはティルを嘴で掴み、こちらへ寄せて覆った。

「けほっ、けほっ！」

少し煙を吸ったのか、激しく咳き込むティル。

翼の間からリンクの方を確認したが、その光景を見て思わず驚愕した。

リンクの体を包むようにヴァシルが囲い、リンクは水の球体の中にいる。

あれでは溺死するのではと思ったが、リンクは眼を閉じて普通に息をしていた。

「ヴァシル、炎を・・・」

『はい』

ヴァシルはリンクの指示を受け、天を仰ぐ。

突如雲が空を覆い、雨が降り出した。

ふと気づけば、ヴァシルの眼が普段より輝いている。

—— ジュオオオオオオオオツ・・・！

木を燃やしていた炎が雨で消されていき、黒煙が天へ立ち昇った。

少しして完全に鎮火され、ファルケ達が翼を広げる。

ヴァシルも球体を消して、天の雲を晴らした。

「ありがとう」

私がファルケに礼を言うと、1つ頷かれ飛び立って行く。

ロターもファルケと共に空の彼方へ消えた。

ファケイトとは言うつと、ティルの腕の中でグッスリしている。

「フニヤア……」

などと寝言らしき言葉も聞こえる中、ヴァシルはリンクに一礼して天へと消えた。

それぞれ武器を消して、私達はその場に座り込むがリンクは俯いたまま立っている。

「頭、冷やしてくる……。大丈夫、堕ちないから」

リンクは一言漏らして、森の奥へ消えた。

追い駆けようとしたフロツティを、私が押さえる。

首を横に振ってダメと合図すると、渋々腰を下ろすフロツティ。

私はただ、リンクが入っていった燃えかけた森へ視線を流していた。

堕ちない、か……。

私は昔の出来事を思い出していた……。

16話・崩れる心と堕ちない心（後書き）

脳裏に歪む昔の思い出。

少女と少年は何を思い、何を手に入れるのか。

17話：追憶の先に見た物（前書き）

ふう、遅くなりました。

テスト期間故このような更新速度に・・・。

すいません。

後少してテストから解放されます。

頑張って17話、参りたいと思いますっ。

17話：追憶の先に見た物

<Side グラムドリンク>

兄さんは、如何して向こう側に……。

分からない、分からないよ兄さん……！

僕は森の中で1人、木に身を預けて考え込んでいた。

「……右目」

ふと兄さんを思い出し、右目が変わったのを思い出す。

「右目が、変……何処かで……」

そつだ、何処かで聞いた事があつた。

『禁忌は犯さないようにな!』

ガトー先生が言っていたのを思い出し、僕の思考は止まりかける。

まさか兄さん、禁忌を……！

<Side リアファル>

「なあ、何があつたんだよ。昔に」

フロツティが気になって我慢出来なくなったのか、腕組みして不機嫌な表情で問いかけて来る。

気になる気になる、とティルも視線で訴えていた。

他人のプライバシーを話して良い訳が無いのだが、これからの事もある為、私は口を開く。

「2人共、グレインさんが行方不明になったのが1年前、と言う事は知ってるでしょう?」

私が念の為確認すると、2人は顔を見合わせてからコクリと頷いた。

「なら、1年前と言えば?」

別の質問を投げかけ、2人が考え込む。

そう、リンクが堕ちたのは1年前。

また浮かび上がって来たのも、同じく1年前だ。

「グラスタ召喚試験!」

先にティルが思い出し、あっと声を上げてフロツティが頷く。

「そう、グラスタ召喚試験。その頃よ、リンクが堕ちたのは・・・」

1年前。

リンクはいつものように家へ帰宅し、兄が帰って来るのを晩御飯を作りながら待っていた。

だが、いつまで経っても帰って来る事は無く、料理は冷えてしまう。

『遅いなあ・・・』

そのまま知らぬ間に夜が明け、リンクは何かあったのではと不安になり警察へ電話した。

だが兄の姿は行方知らず。

結局は見つからないまま、1日が過ぎた。

『兄さん・・・』

今まで1人で家にいた事など、ほとんど無かった。

隣にいたはずの頼もしい人が、急に消えた寂しさがリンクを包み込む。

リンクは次の日、学校へ行かず家で兄の帰りを待ち続けた。

リンクが連絡も無しに休校したのを心配して、私達は3人そろって家へ向かう。

呼び鈴を鳴らし、リンクが勢い良く扉を開けた。

『兄……さん……』

兄でない事を確認し、俯くリンク。

『どした？連絡が無えから心配したんだぜ？』

フロツティが声をかけるものの、少しして小さな声でリンクが口を開いた。

『ん、ごめん……。ちょっと気分が悪くてね』

『そうか、じゃあ早く治せよ。明日、また会おうな』

フロツティとティルはリンクに手を振って帰ったが、私は帰らない。

そんな私を不思議に思ったのか、リンクは首を傾げる。

『誤魔化せるとでも思った？幼馴染を甘く見ないでくれる？』

私は強引に家の中へ入り、リンクに何があったのか説明を求めた。

兄が消えた事を知り、私はふとリンクを見る。

魂を無くしたような眼をしているリンクに、思わず苛立ちを覚えた。

『堕ちても、グレインさんは帰って来ないわよ』

私は一言言い残して玄関の扉を開け、リンクの家から出る。

その言葉をリンクが如何受け止めたのかは知らないが、リンクは次

の日登校した。

前日より幾分ましになっていたが、それでもまだ吹っ切れていない。

運悪く、その日はグラスタ召喚試験だった。

私達は何事も無く2体ずつ召喚出来たが、リンクはなかなか出来ない。

本人のやる気が無い、というもある。

ガトー先生も困ったように顎を触り、リンクを励ましてみたがいずれも効果が無かった。

『何やってんだよリンク、んなもんバシッと決めちまえ!』

フロツティはリンクの背中を叩き、胸を張る。

『う、うん』

リンクがもう1度ゴッターを纏い、自分のグラスタを思い浮かべた。クラス全員の皆がそれを見守り、ゴッターが形を変えるのを見つめる。

ゴッターが巨大に膨れ上がり、鳥の姿を形取った。

『おい、このグラスタは・・・!』

ガトー先生が思わず凝視し、出現した巨鳥を見上げる。

『お主が私の主か・・・？』

古鳥はリンクを見下ろし確認を取るが、哀れみの視線を向けた。

如何やらリンクの揺れた心を読み取ったらしい。

『主に相応しいとは思わんな・・・』

古鳥の言葉にリンクがビクツと反応し、俯いた。

ギリツと奥歯を噛み締める音も聞こえ、先生はひとまず契約だけを済ませて授業を終える。

古鳥――ヴォーゲルはフウツと消えてアンダーヴェルトへ帰った。

だが、問題はその後校時である。

何処から聞きつけたのかは知らないが、古鳥という高位のグラストを召喚したリンクに、5期生の生徒連中が挑戦を挑んで来た。

私達は成すすべも無く、リンクと共に川沿いの草原へ連行される。

人数は5人。

『ほれ、召喚してみろよ！』

『お前あれだろ、行方不明のグレインの弟なんだろ？』

奴等はリンクを挑発するが、リンクはグレインさんの事しか考えていないようでその言葉も耳に届いていない。

それにカチンと来た奴等が、悪口を言い出した。

私達は上級生に逆らうと、後で如何なるかは知っているので手を出せない。

『何だよ、結局あの噂は嘘って事かよ』

『俺達の時間を無駄にさせんなよなあ』

『お前らが勝手に思い込んでるだけだろうが！』

流石に我慢出来なくなったフロツティが、思わず声を張り上げた。

『んだと!?!』

『1期生の坊主が何言ってるんだ!』

奴等は起こってグラスタを召喚する。

当然、今日召喚したばかりの私達が勝てる訳も無かった。

それを予想していた私は謝ろうとしたのだが、向こうが言い放った言葉に思わず足を止める。

『そもそも、あのグレインの弟って事からム力つくぜ!』

『成績優秀、何でも出来るあいつには俺達も腹立ってたからな!』

『どうせこの世の中につまなくなつて逃げたんじゃねえの？自殺とかだよ』

腹を抱えて笑いだす連中に私も苛立ちを覚えた。

だが、次の瞬間足を止めてリンクを凝視する。

『我が乞うは疾風の翼……その翼以て天を翔けよ……』

リンクのゴツターが渦巻き、巨大化して巨鳥が出現した。

奴等は本当に召喚するとは思っていなかったらしく、腰が抜けている者までいる。

出現したヴォーゲルは、リンクの視線の先にいる連中を捉え、竜巻を生み出した。

慌てて尻尾を巻いて逃走する連中に、フロツティが拳を握りしめて喜んでいる。

ヴォーゲルは竜巻を消して、リンクに向き直った。

『……前よりは、確固たる意志を持っているな』

その言葉に私は内心驚き、リンクを見てみると以前のような揺れた瞳はしていない。

一体何を決心したのかは知らないが、とにかく心は静まったようなので安堵する。

『もう・・・堕ちたくないから』

『それでこそ主に相応しい・・・。私は主の指示に従おう』

ヴォーゲルはただそう言い残し、アンダーヴェルトへ帰還した。

フロツティとティルは私が無理矢理家へと帰るよう促し、リンクと2人きりになる。

『吹っ切れた・・・？』

私が確認を取ると、リンクは光の灯った瞳でしつかりと頷いた。

『リアの言う通り、堕ちても兄さんは帰って来ない。けど、僕は待つよ・・・。兄さんが死んだと確信が持てたら諦める。確信も無いのに堕ちるのはおかしいから』

『そう・・・。なら言っておくけど』

私は安堵の息を吐き、リンクに背を向けて言い残した。

『我慢は禁物。1人で無理なら・・・分かってるわよね？』

『うん』

背後から明るい声が返って来た為、私は安心して帰宅する。

それからリンクは落ち込んだ様子も無く、相談もせず今までを過ごした・・・。

「あなた達2人は早いうちに帰っていたから知らなかったでしょうけど、こういう事があったのよ。2人揃って、こういう感情的の事には弱かったからねえ……」

私はテイルとフロツティに嫌味の視線を送り、反省を訴える。

「す、すみません……」

2人は縮こまって頭を下げ、素直に謝った。

私は一息吐いて許す事にし、顔を上げる。

—— ザザッ、ザザザッ

草村の中からリンクが慌てたように飛び出し、テイルに向かって行った。

「テイルテイル！」

「はいいい！何でしょう！？」

物凄い慌てようだったので、思わず座ったまま背筋を伸ばす。

「禁忌って何だった！？」

「はい！あ、え？禁忌……？」

調子で返事してしまおうテイルだったが、すぐに考え直してリンクがこの質問を問う訳を考えた。

私はリンクに落ち着きなさいと声をかけ、やっと息を整えるリンク。

「禁忌を詳しく教えて」

「え、長いよ？」

「いいから」

真剣なリンクの表情に、テイルは顎に手を当てて書物を思い出し口を開く。

「『術師は禁忌を犯してはならぬ。禁忌とは対の竜を召喚する事であり。漆黒の竜、確固たる盾を誇り黒き炎を吐きて殲滅の神なり。白銀の竜、鋭利な矛を身につけ白き炎を吐きて消滅の神なり。彼等を召喚した際、激しい激痛と左右どちらかの視力を代償として奪う。そして召喚時に代償を契約し、術師が死ねば契約部位を食われる事となる。』汝等、禁忌を犯す事なかれ』……だったかな？」

「左右……どちらかの、視力……」

テイルが言い終わると、リンクが座り込んでしまった。

「ど、如何した？」

フロツティがその場に座ったまま、リンクを心配して声をかけてみるとリンクは地面に生えている草を握りしめる。

「兄さんは・・・兄さんは、禁忌を犯したんだ・・・！」

リンクの言葉を聞いて私は思考が止まりかけ、ティルは驚愕にポカんと口を開けていた。

フロツティに至っては、禁忌の重大さを分かっていないらしく頭上にクエスチョンマークを浮かべている。

「兄さんの右目、たぶん見えてない・・・」

「そんな・・・如何して禁忌を・・・!?」

ティルがファケイトを落としそうになる程驚き、口に手を当てた。

「何か理由があるんだ。兄さんが自分から、そんな事するはずが無い・・・！」

「例えば・・・人質」

「ッ!?!」

私が思いつく言葉を言ってみると、リンクがはっと反応する。

グレインさんは昔から情が厚い人だったから、人質を取られた場合には弱いと思っていた。

今回が良い例だ。

これで本当に人質を使ったのだとすれば、その人質になった者は誰?という事になる。

「で、リンクは如何したいの？」

「僕は・・・」

私が問いかけてみると、握りしめていた草を放しリンクが顔を上げた。

「兄さんは利用されてるだけかもしれない。だったら、救いだす・・・！」

「おし、乗った！」

フロツティがいち早く反応し、リンクの思いに同意する。

私も！とテイルが挙手して、リンクに笑顔を向けた。

私？

幼馴染が困ってるのに、手も差し伸べないなんて聞いた事無いわね。

「右に同じく」

リンクに笑みを向けて私も同意する。

・
これで目標が決定し、私達は奴等の拠点へと向かう事を決意した・・・

17話：追憶の先に見た物（後書き）

決意を新たにし、確固たる意志を得る少年。

目の前に現れるは、大蛇なりて・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5945x/>

魔物と術師

2011年11月25日23時55分発行